
colors

湊 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

colors

【Nコード】

N5970Y

【作者名】

湊翼

【あらすじ】

16歳の誕生日。

美穂奈^{みほな}は政略結婚させられる為に、部屋で軟禁状態にあった。

そこで、毎年誕生日になると現れる不思議な本を見つける。

いつも何も書いてないその本に、今日は金色に光る文字が浮かび上がった。

惹きつけられる様にその文字を目と指で追った美穂奈は、最後に文字が浮かび上がった瞬間、光に包まれ、気付くと知らない場所に立っていた。

……各題名にあまり意味はないです。題名センスないので、適当に付けてます。

登場人物（前書き）

よくよく思い返してみると、登場人物についての容姿などの細かい描写がない事に気付いたので、ここで補完しておきます。

本当は、本編できちんと文章でお伝えすべきなんですが、すみません。

登場人物が増えたり、ネタバレの為載せていない設定などを、進行状況に応じて徐徐に追加していきます。

登場人物

美穂奈 ミホナ

出身…日本（東京）

性別…女

年齢…16歳

身長…155？

容姿…ウェーブのかかった茶の髪は肩口ほど。

白い肌に、血色の良い唇、大きな瞳と、パツと見は美少女だが、お嬢様の皮を被らず素で話すと割と毒舌。
幼く見られがちだが、幼児体型に非ず。

備考…幼くして両親を亡くし、大財閥の夫妻に拾われる。

もともと知識欲があり、負けん気が強い為、学校での成績は常にトップ。

スポーツも運動部の人間と比べて遜色ないほどには出来る。

16歳の誕生日に赤い本に浮かび上がった文字を見ると、いつの間にか異世界に紛れ込んだ本作の主人公。

婚約者様が大嫌い。



ラズIIサプレーン

出身…カラーズ colors（オーラー）

性別…男

年齢…23歳

身長…185？

カラー
色…緑系統（灰緑色）

得意魔法…防御系魔法

さいこうランクまほう
最高級魔法…A級

容姿…長身細身に、灰緑の髪に、同じ色の瞳。

髪は襟足が少し長い。

丸い鼻眼鏡をかけており、視力はあまり良くない。

備考…緑の原色持ちを曾祖父に持つ。

その為、緑の原色の血筋が途絶えない様国に保護され、人里離れた森の中で暮らしている。

魔法的才能が高いのも、国に期待される要因の1つ。

突然家の中に現れた美穂奈に殴られたり、面倒見ろと言われたりする幸薄いお人好し。

女性は少し苦手だが、美穂奈の事は女というより妹感覚で見えており割と平気の様子。



リング||リンドベルイ

出身…colors（オーラー）
カラーズ

性別…男

年齢…23歳

身長…178？
カラー

色…黄色（原色）

得意魔法…攻撃系魔法

さいこうランクまほう
最高級魔法…S級

容姿…黄色の髪に、青い瞳。

何がそんなに気に入らないのか、眉間には常に皺が寄り、眉はつり上がっている。

髪は短く、スツキリしている。

口は悪いが黙っていれば、眉目秀麗の美男子。

備考…カラーズ colors 有数の名家、リンドベルイ家の嫡男。

黄色の原色持ちで、魔法的才能は天才的。

こう見えて、悪いのは口だけで、頭が良く運動も出来て何かと優秀。
ラズの友人で、極度の女嫌い。

美穂奈の事は、腹の立つ変な女だと思っている。

ラズ曰く、似たもの同士の同族嫌悪ではないかとの事。



ソファイアIIコバート

出身…カラーズ colors (オーラー)

性別…女

年齢…25歳

身長…161?

カラー 色…水色系統 (薄い空色)

得意魔法…治癒系魔法

さいこうランクまほう 最高級魔法…C級 ランク

容姿…薄い空色の腰まである長い髪を後ろで一纏めになっている。

瞳は、髪より少し濃い水色。

特別美人という訳ではないが、笑顔がとても綺麗である。

備考…亡くなった両親にかわり、1人で宿を切り盛りしている女主人。

物腰柔らかな雰囲気は、一緒にいるととても癒される。

優しく、料理が上手で、家事が出来、働き者と、オーラーのお嫁さんにした人? 1。

美穂奈の宿滞在は、可愛い妹が出来たと思いとでも喜んでいる。
ちよつとした占いやおまじないなどが好き。

プロローグ

ヴォルフイン

水狼が鳴き、ラズは読んでいた本から視線を上げた。

水狼は気性が荒い方だが、こんな風に鳴く事はあまりない。
森で何かあったのだろうか？

不思議に思い窓の外を見てみるが、特に何もない。

首を一度だけ傾げ、ラズは視線を本へと戻した。

緑の革表紙に金の縁取りがある分厚い本。

ページを開けば、そこは真っ白な空白ばかりが続く。

だが、ラズはその灰緑色の瞳でそこに何かが書かれているかの様に
凝視した。

細く、長い指が、その真っ白いページをそつと撫でると、うつすら
と文字が浮かび上がった。

まるで、ラズの指から紡がれているかの様に現れるその文字は、金
色に輝きゆつくりと白いページを埋めていく。

ゆつくりゆつくりとページを埋め、最後のページでその光はさらに
大きく膨み…。

そして、弾けた。



出来れば今日という日を迎えたくはなかった。

と、自室に閉じこめられた美穂奈みほなは本気でそう思っていた。

今日。

そう、美穂奈は今日で16歳になるのだ。

16歳の誕生日、それは今まで行ってきた誕生日とは違う響きを持
つ。

「16歳…。嫌な法律よね。」

呟いて、美穂奈はベッドに突っ伏しる。

そう、16歳。

日本では、女は16歳、男は18歳になると親の同意さえあれば結婚が許されるのだ。

そう、親の同意さえあれば、政略結婚させる年齢という訳だ。

「お義父様とお義母様の為だけ…。」

美穂奈はこの家の本当の子ではない。

小さい頃、両親を亡くし、どうする事も出来ずただ呆然と佇んでいた美穂奈を助けたのが、この家の夫婦であった。

だから、美穂奈は、この家に対して凄く恩を感じていた。多少の事なら頑張れる。

勉強も、運動も、礼儀作法だって、一生懸命に頑張った。

彼等の期待に応えられるよう、一生懸命に。

だけ…。

「結婚か…。」

呟いて、思い出す。

なんともつまらないあの婚約者の事を。

そう、あれは初めて顔を合わせて、庭で散歩した時の事だ。

彼はこう言った。

「あなたの様な素敵な人が僕のお嫁さんで本当に良かったです。あなたとなら、きっと良い家庭を築けると思います。」

と…。

何とも型にはまった定型文。

庭に出る前に少し「ご趣味は？」「お茶を少々」という、やはり型にはまったやりとりを少ししただけで、私の一体何がわかるのか。

どこをどう見て、何を基準として、私が素敵な人なのか。

そう思うと、吐き気がした。

そして、この人との先が見えてしまった。

型にはまった、つまらない結婚生活。

そんなものを強いられ一生生きていくのかと思うと、急に嫌になったのだ。

：だからと言って、逃げ出す勇気などないのだけれど。

固く閉ざされた部屋のドアを見て、美穂奈は自嘲気味に笑う。

そう、逃げる勇気なんてないのだ。

なのに、あの両親は一体私がどこに逃げると思ったのだろう。

逃げる場所なんて、どこにもないのに…。

ジツとしてると、時計の音が煩わしく、ゴロンゴロンと無意味にベッドの上で転がる。

「痛っ！」

と、何か固い物にゴツンと頭をぶつけ、美穂奈は転がるのを止め、体を起こした。

無駄にふかかなこのベッドの上に、一体何なんだと思った私は、ソレを視界にとらえビクリと体を震わせた。

赤い革表紙に、金の縁取りが付いた分厚い本。

「今年も…、なの？」

眩いて、美穂奈はソレにそっと手を伸ばす。

ずっしりとした重みが、掌と心の奥底に刻まれる。

指先でそっと撫でてから、美穂奈は視線を巡らせる。

今、この部屋には自分しかいなく、そして、唯一の出入り口であるドアはやはり固く閉ざされている。

そうすると、やはりこの本は…。

そっと、ページを捲ってみる。

白く眩しいページが、どこまでも続く。

かなり分厚い本だが、さすがに何も書いてないとパラパラと繰るだけで終わり、あっと言う間に最終ページに到達した。

「やっぱり、あの本なのね…。」

何も書いてない。

何も書いてないからこそ、美穂奈はこの本が毎年見ている物と同じ

だと判断出来た。

何も書かれていない不思議な本。

毎年、美穂奈の誕生日になると突然現れる不気味な本。

「仕方がないわね。」

呟いて、美穂奈はその本をそつと枕元に置いた。

ちなみに、不気味だからと投げ捨てたり燃やしたりしても、いつの間にか戻ってくるので、余計に気味が悪い。

それならば、今日という日が終わるまでどこかその辺に置いておく方が幾分かマシである。

今日が終われば、この本はやはり知らない間に消えているのだから。その時、外から犬の遠吠えが聞こえ、美穂奈は顔を上げた。

滅多な事がなければ鳴かない様に躡られている番犬が鳴いている。珍しい、泥棒でも入ったのだろうか？

不思議に思い窓の外をみるが、特に何もない。

首を一度だけ傾げ、美穂奈は視線を部屋の中へと戻した。

瞬間、ビクリと体が震える。

枕元に置いてあった、あの赤い本が、ひとりでに表紙を開いたのだ。風ではない。

というか、もし風が吹いたとして、革表紙に金の縁取りがあるあの本の表紙を捲る事なんて無理だろう。

「な、何？」

恐る恐る近付くと、真っ白いページが微かに光っている。

目をこらし良く見れば、それは金色に輝く文字、…の様なものだった。

正直読めない。

つまり、日本語と英語ではない。

フランス語でもないと思う。

…アラビア文字？

最初に抱いた感想は、ソレだった。

模様の様な、でも規則性のある文字の様な、そんな金色に光り輝く

不思議な文字が白いページを埋めていく。

「綺麗…。」

気味が悪いとか、怖いというよりも先に、そう思った。

金色の光は、小さな光の粒子の形で文字の周りをキラキラと彩る。

そつと指を伸ばし、触れてみるが、何もない。

美穂奈の指にその粒子が付くわけでも、感触がするわけでもない。

けれど、美穂奈はなんとなく、その文字を指でなぞった。

ゆっくりと進むその光を、美穂奈も同じ速度でゆっくりと後を追う。

点字をなぞるかの様に、そつと。

どれくらいそうしていたのかは分からない。

ただ、この追いかけてこもようやく終わりが見えてきた様だ。

最後の白いページ。

そこを、今までと同じように金色の文字は進み、埋めていく。

ゆっくりと、美穂奈が最後の一文を撫でた瞬間、その光は大きく

膨らみ…。

そして、弾けた。

少女と男

「どうしよう。」

やってしまった、と美穂奈は頭を抱えていた。

「いや、だって急に出てくるから…。」

言い訳がましく呟いてから、美穂奈は辺りを見渡し、もう一度頭を抱えた。

木の温もりを感じられる簡素な小屋。

ついさっきまで、自室にいたのに…、どうして？とか、そんな事よりも、だ。

美穂奈は目の前で倒れている男の人を見た。

この男の人が突然目の前に現れた、そう思っていたが、この状況。

ここは美穂奈の部屋でも、美穂奈の家でも、もう一つ言えば、窓の外景色からして、美穂奈の住んでいる街でもなさそうだ。

考えるまでもなく、美穂奈が、突然現れたのだ。

この男ではなく、美穂奈が突然。

なのに。

美穂奈は手の中にある、あの赤い本をギュッと握る。

急に見知らぬ男が出現したと勘違いした美穂奈は、手近にある本で男を思いっきり殴り倒してしまったのだ。

死んではないだろうが、何千ページもある分厚い本の、角。

しかも、金の飾り縁のところで、本の重みに従い腕を振り下ろし殴ってしまった。

しばらくは目覚めそうにない。

美穂奈は一瞬の間の後、男に手を合わせた。

「ごめんなさい。」

一度、しっかりと頭を下げてから、美穂奈は改めて男を見る。

「…変わった色。」

灰緑の髪に、美穂奈は小さく呟いた。

そういえば、一瞬しか見ていないが、今は閉じられている瞳も同じ色だった気がする。

「ふぁ…。」

美穂奈は大きくあくびを1つ漏らす。

何だか無性に眠たい。

思いつ切り運動した後の様な気怠さが、睡魔を連れてやってくる。

美穂奈はそれを追い払うように一度頭を振り、これからの事を考えた。

まずは、この人が目を覚ましたら謝って、それからここがどこなのかを聞こう。

で、場所が分かったら、家に連絡してかえ…。

そこまで考え、美穂奈は首を傾げた。

帰って、どうするんだろう。

眠たく、重い頭で考える。

帰ったって待ってるのは、つまらない婚約者様と、恩は感じていても本当の親だとは思えない義両親。

つまらない結婚生活に、終わったも同然の人生。

帰って、どうするの？

どうすれば良いの？

眠いせいだろうか、頭がしっかりと働かない。

少し、眠った方が良いのかもしれない。

眠れば、少しは、マシな打開策が見つかるかもしれない。

美穂奈はそう結論付けると、体を小さく丸め、そのまま床の上に体を預けたのだった。

「どうしよう。」

何が起こったんだ、とラズは頭を抱えていた。

「急に殴られて、えっと……。」

気絶する前の事をゆっくりと思い出しながら、ラズは床で丸くなって寝ている少女を見て、もう一度頭を抱えた。

すやすやと安らかな寝息を立てて眠っている少女。

ついさっきまで、本を読んでいた。

長年かけて解読し読み解いていた本を読み終えてしまい、達成感と明日から何をしたら良いんだろうという虚無感に胸の中が縋い交ぜになって……とかそんな事よりも、だ。

ラズは、目の前ですやすやと気持ちよさそうに寝こけている少女を見た。

突然目の前に現れた見知らぬ少女。

その子は、ラズに何か言うでもなく、聞くでもなく、いきなり殴ってきた。

何か固くて重い物で。

相手を気絶させ、その後家の中を漁り金目の物を盗んでいくなら強盗だ。

気絶させ、トドメをさせば、快樂殺人者か殺し屋かもしれない。

が、相手を殴って気絶させた後に、その場で丸まって寝てしまうのは、いったい何だ？

それは、ラズが知る知識を総動員させても、何にも属さない、意味不明な行動であった。

ラズは首を傾げた。

「何がしたかったのかな？」

呟いてから、ラズは改めて少女を見る。

ふわふわとウェーブのかかった茶色の髪が、床に散っている。

床の木の色と良く似ているから、踏まないようにしなければ。

年々度が合わなくなってきた眼鏡を押し上げ、そう思ったラズ

は、ズキリと痛む頭に一瞬眉をしかめた。

：「そういや、何か固く重い物で気絶する程殴られたのだった。忘れていた訳ではないが、目の前で眠るこの少女のせいで考える暇がなかった。」

一体、何で殴られたのだろう？

少女の腕は細く、大きな武器を振り回したりは出来ないだろう。

それに、そんなものを隠す場所もないし。

この小屋に、何かを隠せるだけのスペースも死角もないのは、小屋の持ち主であるラズが一番知り尽くしている。

だとすると、少女が持てるだけの大きさ：あ、もしかしてこれか？ラズは、少女が大事そうに抱えている本を見た。

長年、自分が読み解いていた、緑の革表紙に金の飾り縁が施してある、あの分厚い本。

「そっか、あれで殴られたのか。そりゃ、あれだけ分厚い本で殴られたら気絶ぐらい：あれ？」

そこでラズは何か違和感を感じる。

少女が抱きかかえている本。

それは、たしかに自分が毎日毎日見てきた本なのに、何かが違う。

「あ：、色：。」

呟いて、確信する。

そう、ラズの知ってる本は、緑の革表紙に、金の飾り縁。

だが、少女が抱えている本は、赤い革表紙に、金の飾り縁。

色が、違うのだ。

「だとすると、やっぱり中身も違うのかな？」

ラズは、そっと少女へと手を伸ばす。

その、赤い本の中身が知りたくて。

やはり、あの緑の本の様に、パツと見は、ただの白紙の本なのだろうかと。

指先に、本が当たる。

そっと撫でれば、ザラリとした革の感触。

緑の革表紙と同じ感触だった。

瞬間、少女の瞳がゆっくりと開いた。

髪と同じ、濃い茶の瞳がこちらに向けられ、ラズをとらえた。

あ、ヤバイ。

ラズが咄嗟にそう思ったときには既に遅かった。

「…キヤーツ！」

少女は先程と違い、そう叫んだ後、ラズの頬にあの赤い本を叩きつけたのだった。

疑いと自己紹介

「大変、申し訳ございませんでした。」

美穂奈は勢い良く頭を下げた。

目の前には、赤く腫れ上がった頬を押さえている男。

美穂奈が放った2発目は、不幸中の幸いなのか、表紙の部分が頬に当たった為、男は気絶せずに生きている。

生きてはいるが、機嫌は最悪であった。

それはそうだろうと美穂奈は思う。

もし自分が逆の立場であった場合、美穂奈の機嫌も最高潮に悪いだろうから、このなんとも言えない微妙な空気には納得している。が、この状況については何1つとして、納得も理解もしていなかった。

なので、唯一の情報源であろう彼がこの状態では、美穂奈もお手上げである。

早く機嫌を直してはくれないだろうか。

そんな希望の元、頭を下げたまま、チラリと男を盗み見る。

目を覚ました彼の目は、やはり髪と同じ灰緑色だった。

日本人にあるまじき不思議な色。

「……………で？」

ビクリ、と、美穂奈は肩を揺らした。

ずっと無言で怒っていた目の前の男が、口を開いたのだ。

「え？」

美穂奈は顔を上げて、首を傾げた。

何を聞かれているのか、わからなかったからだ。

「君は一体、何がしたいの？」

「…はあ？」

問われた言葉に、美穂奈は盛大に首を傾げた。

何がしたいって…。

美穂奈が理解出来ずに呆然としているのを横目に、男は続けた。

「あいにくと、この家には価値のある様な物はないよ。それに、僕は特に恨まれる様な事をした覚えもない。」

「………はあ。」

美穂奈はとりあえず頷く。

たしかに、この小屋は簡素でパツと見、価値の有りそうな物はない。そしてこの男も、誰かに恨みを買うような感じには見えなかったからだ。

「君の目的が何かは分からないが、とにかく、人の家の床で寝るのはどうかと思う。…出ていってくれ。」

言って、出口であろう扉を指さす男に、美穂奈は首を振る。

「あの、たしかに、いきなり殴ったり、勝手に寝てしまったりしたのは謝るわ。でも、私の話も聞いて？」

ここがどこなのかも、何故ここにいるのかもわからない状態で外に放り出される訳にはいかない。

美穂奈は必死で男に頼み込んだ。

「私、ここがどこかも、いつの間にこんなところにいたのかもわからないのよ。本当よ？突然家の中に上がり込んだりして、あなたの気分を害したのは謝るから、少しでもお話をしてくれない？」

「…ここがどこかもわからない？何、君、記憶喪失とかでも言うの？」

驚いたように聞いてくる男の言葉に、美穂奈は首をふるふると振って答えた。

「違うの、そうじゃないの。名前だってちゃんと言えるもの。私は美穂奈よ。美穂奈…、えっと…。」

そこで口を噤み、美穂奈は一度何かを考えるように視線を彷徨させた後、男を見て困った様に笑った。

「だからね、その…。あなたの名前も教えてもらえると助かるのだけれども。」



ちょっと苦しい繋ぎだったかしら。

そう思いながらも、美穂奈は男から聞き出した情報を頭の中で反芻する。

男の名前は、ラズⅡサプレーン。

美穂奈よりも7つ年上の23歳。

ここは彼の家で、都心部から少し離れた森の中にあるらしい。

婚約者との結婚に逃げ出した形になっている自分が、あの家の姓を名乗って良いのか、咄嗟にそう思い言葉が出てこなかった美穂奈は、苦し紛れに男の名前を聞いた。

元々聞くつもりではいたが、もう少しきちんと自己紹介をし、美穂奈の事を知ってもらった上で聞くつもりだった。

出会い頭いきなり殴って、こっちの印象は最悪だろうから、少しでも印象が良くなるようにと考えていたのに…。

だが、美穂奈のあんな無礼な聞き方に、男は更に怒ったりなどはせず、小さく溜息を吐いた後、上記の事を教えてくれた。

ほとんど単語のみの受け答えだったけど、ちゃんと答えてくれるあたり、良い人なのかもしれない。

「あ、えっと。ラズさん。」

「ラズで良い。僕も、ミホナって呼ぶから。」

年上を呼び捨てにするのはどうなのだろうとは思うが、本人がそう言うのなら出来るだけ要望には応えよう。

「じゃあ、ラズ。」

「何?」

美穂奈の問いに、ぶすつとしながらも答えてくれるラズは、やはり

優しいと思う。

「ラズの髪と瞳って、とても珍しい色ね。何人なの？」

美穂奈がそう問えば、ラズは一瞬不思議そうな顔をした後、すぐに眉をしかめ首を傾げた。

「何人？…オーラー出身だけど？」

「オーラー？」

今度は美穂菜が首を傾げる番だ。

聞いたことない地名だ。

元よりそんなに地名に詳しい訳ではないけども。

日本国内の地名だって、全部わかる訳ではないのだし。

「えっと、それはどこかしら？アメリカ？イギリス？ロシア？」

「アメリカ？イギリス？ロシア？…ミホナ、君が何を言っているのかわからないんだけど？」

「え…？」

不思議そうなラズの顔に、美穂奈も同じ顔で返した。

今、美穂奈は比較的有名な国名を口にしたつもりだ。

なのに、何故ラズは知らないのか。

「ここは、日本……、ううん。地球よね？」

当たり前だと思いつつも、美穂奈は聞いた。

ラズは美穂奈の問いに、何当たり前の事を聞いてるんだって笑ってくれば良い。

なのに。

「チキュウ？…ミホナ、君が何を聞きたいのかは分からないけど。

ここは『^{カラーズ}colors』の中心とも言われているオーラー都市の外れにある森の小屋の中、だよ。」

「カラー…ズ？」

ラズの言葉に、美穂奈ただ呆然と呟く。

^{カラーズ}colors。

それが、この世界の名前。

この世界…。

そう、私の知っている世界とは違う、別の世界。
異世界の、名前なのだと、それを理解するのに、私は、少しの時間
を要した。

転移魔法と魔法級

ラズから聞いた言葉を、美穂奈は理解すると同時に、今日の前にいるラズをどう陥落するかに頭を悩ませていた。

良くは分からないが、美穂奈は今、異世界にいるらしい。理解し難いが、それは分かった。

一瞬目を瞑った後に、急に知らない家の中にいたのだ。

それは揺るぎようがない事実。

受け入れよう。

でだ、問題は大きく分けて2つ。

どうやって元の世界に戻るのか、と、どうやってここで暮らしているのか、だ。

元の世界に帰ったって良い事は何もない。

つまらない婚約者様との結婚が待っているだけなのだから、帰らなくてはいけない目的はあまりなかった。

なので、すぐに帰れなくても、美穂奈的には何も困る事はなかった。

ただ、残る問題の後1つ。

ここで、どうやって暮らしていくのか、だ。

すぐに帰れない、または帰らない場合、美穂奈はしばらくここで暮らしていかなくてはいけない。

仕事があるなら、働いて普通の暮らしをおくるのだけれど…。

ただ、美穂奈はこの世界で戸籍もなければ、頼れる親戚知り合いの類もない。

この世界に戸籍があるのかどうかは知らないが、住民登録をしていなければ就職するのは難しいだろうし、万が一働けたところで、親戚や知り合いがいなければ、当面の住む場所や食事などの生活費に困る。

と、すればやはりラズをここでなんとかしてでも落としておきたかった。

幸いラズは見た限り一人暮らしの様だし、何より出会い頭いきなり本で殴って気絶させられたのにもかかわらず、今現在美穂奈とこうやって話をしてくれる優しいお人好しだ。

美穂奈はゴクリと息を飲んだ。

この交渉は、失敗出来ない。

「良くわからないけど、君はこの街の出身じゃないって事が言いたいのか？」

「ええっと、そうね。とりあえず、私はオーラー出身じゃないわ。」

答えて美穂奈は天上を見上げる。

何て説明すれば良いのか…。

そこまで考え、美穂奈は首を振った。

いや、下手に嘘は言わない方が良いかもしれない。

だって、ここは美穂奈の知っている常識が通じるのかも分からない世界なのだ。

ちよっとした事ですぐにボロが出てしまう可能性だってある。

その場合、信用問題にヒビが入ってしまう。

ただでさえ、美穂奈は信用されていないのだ。

これ以上、その信用値が下がろうものなら、さすがにお人好しのラズと言えど、美穂奈は今度こそこの小屋を追い出されてしまう。

正直に話そうと決めた美穂奈は、少し考えた後小さく息を吐いてラズを見た。

「あのね、ラズ。私の話を、最後まで聞いてくれる？」

美穂奈の真剣な瞳に、どこか投げやりな態度だったラズが姿勢を正した。

「一応、さっきから君の話は聞くように努めているけど？」

「そうね、ラズはさっきから私の話をちゃんと聞いてくれてるわ。そうよね…。」

ラズに、というより自分に言い聞かせるようにそう言って、美穂奈は胸に手を当て、大きく息を吸う。

「ラズ。私自身信じられないんだけど、私、この世界の人間じゃな

いかもしれない…。」

「……………は？」

少しの間の後返ってきた返事に、美穂奈は大きく頷いた。

「待って、分かってる！ラズの言いたいことは凄く良くわかる！！でも、本当なの！私は、地球って惑星の日本国出身なの。ねえ、ラズ、あなた地球って聞いた事ある？日本は？ちなみに、私はC O I^{クス}Orsもオーラーも聞いた事ないわ！」

一度声に出してしまえば、不安と疑問の山だらけで、美穂奈はラズが困るだろうと思いいながらうまくし立てた。

そんな美穂奈に、ラズは頭に手を置きながら待ったをかける。

「ミホナ、落ち着いて。」

だが、美穂奈は首を振った。

「いいえ、待たないわ！それに、落ち着けるはずもないじゃない！私は、お義母様達に部屋に閉じこめられてたのよ？なのに、目を瞑って数秒後に目を開けたらこんなところにいるとか、あり得ない！普通に考えてあり得ない！！これは宇宙人の仕業だとも言うの？それとも魔法？どれも非現実的だわ！」

一気にまくし立て、ゼーツ、ハーツと荒い息を吐く美穂奈に、ラズは恐る恐る声をかけた。

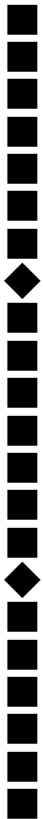
「……………えっと、ミホナ？」

「…何よ？」

何か反論出来るならしてみなさいよとでも言いたそうにこちらを睨む美穂奈に、ラズはとても言い辛そうに口を開いた。

「…えっと、魔法なら、あるんだけど？」

「……………は？」



魔法。

それは常人には不可能な手法や結果を実現する力のことである。

美穂奈は、ぽかんと口を開けたままラズを見つめた。

「魔法：が、あるの？」

「あるよ。」

さも当然だと言わんばかりにラズはサラッと答えた。

「何、それって物を浮かせたり空を飛んだり？」

「程度によるけど、まあそんな感じの事は出来るよ。」

真実を、異世界から来た、なんて奇想天外な話を、嘘偽り無くラズに打ち明けておいて良かった、と美穂奈は思った。

この世界に魔法があり、それが当たり前だとされているなら、美穂奈はきっとすぐにボロを出していただろう。

その点では自分を高く評価したい。

「ミホナの世界に、魔法はないの？」

ラズの不思議そうな声に、美穂奈は自画自賛を止めて、頷いた。

「ないわ。物を宙に浮かせたり、人が空を飛んだり出来ない事はないけども：。」

科学が発達した現代日本では不可能ではないが、魔法の様に何も無いところから突然何でも出来たりする訳ではない。

「え、ちよっと待って。魔法があるなら、私がここに居るのも、魔法なの？」

魔法になんか詳しくはないが、転移魔法みたいなのを言えば、そういう事も出来るのではないかと思ひ、美穂奈はラズを見た。

が、ラズは小さく首を振り、その可能性を否定した。

「んと、なんて言えば良いのかな：。魔法はね、たしかにあるんだ。ミホナの言う転移魔法もたしかにある。けれど、魔法には級^{ランク}があってね。一番難しいとされている魔法はS級^{ランク}と言って、使える人間は

ほとんどいない。次に難しいのがA^{ランク}級、順にB^{ランク}級からG^{ランク}級までの8段階。そのうち、転移魔法っていうのは、この8つの^{ランク}級、どれにも属さないSS^{ランク}級なんだよ。ここまではわかる？」

ラズに言われ、美穂奈ラズに言われた言葉を脳内で復唱する。

魔法と言っても、誰もが簡単に使えるものから、修行を積まなければ使えないような難しいものである。

美穂奈がここに来ただろう原因の転移魔法はSS^{ランク}級。

そして、S^{ランク}級と呼ばれる高難易度の魔法が使える人間は、ほとんどいない。

「：つと、あれ？ラズ、1つ良いかしら？」

ふと、美穂奈は疑問を感じた。

「どうして、SS^{ランク}級を入れて、9段階にしないの？それに、S^{ランク}級の魔法を使える人間はほとんどいないって：。」

美穂奈はそこまで言って、1つの答えに行き着き、ラズを見れば、ラズは静かに頷いた。

「そう、SS^{ランク}級を使える人は、もういないよ。あまりの難しさに、取得出来る者がいなくて、随分昔に魔法^{ランク}級から外されたんだ。」

ラズの言葉に、美穂奈は絶句する。

転移魔法は今存在しない魔法。

じゃあ、何故美穂奈はここにいるのか。

転移魔法でないとしたら、どうやってここに来たことになるのか。

「じゃあ、何？魔法じゃないなら、残る可能性は宇宙人？ファンタジーじゃなく、SFな展開なの？」

まさか宇宙人までいるとは言わないわよね。

美穂奈の無言の質問に、ラズは溜息混じりに答えた。

「その可能性を完全に否定する訳じゃないけど、この世界に宇宙人はいないよ。」

「なら、他にどうやって：。」

呟いて、美穂奈は手の中の本に視線を落とす。

赤い革表紙の、金の飾り縁が付いた分厚い本。

いつもは白紙のそのページに、金色の文字が浮かび上がって…。

「……そうよ、本！」

美穂奈ははじかれた様に顔を上げた。

「ラズ！私、この本に金色の文字が浮かび上がって、それを見てたらここに来たの！ねえ、やっぱりこれって魔法じゃないの？」

美穂奈の言葉に、ラズは思い出したと口を開いた。

「そうだよ。ちょっとミホナ、それ見せてくれないか？君が持っているその本、僕が持っている本ととても良く似ているんだ。ほら。」
そう言ってラズが見せてくれたのは、緑の革表紙に金の飾り縁が付いた、分厚い本だった。

「これはね、僕の曾祖父の形見なんだ。」

「ラズの…？」

「ミホナ、君のその本は、一体どこで手に入れたものだい？」

問われて、美穂奈は自分が生まれてからこれまでの誕生日をずっと思い返す。

気付けば、誕生日の日に側にあった。

そして、誕生日が終わればいつの間になくなっていった。

それは、いつの頃からだった？

中学生の時から？

小学生の時から？

いや、違う。

もっと前から。

気付けば誕生日の日に側にあったその本は、本当に、美穂奈が気付いた頃には、そこにあった。

物心が付いた頃には、もうすでに。

多分それは、生まれた時からずっとあったのではないかと、その可能性に気付いた美穂奈は、一瞬恐怖を感じて、小さく体を震わせたのだった。

エルドと緑の本

「名は？」

生まれたばかりの我が子を抱いていたモウズは、その声に振り返り、驚いた。

そこに立っていたのは、世界最高峰と謳われた大魔法使いである自分の祖父、エルドだった。

「…ラズです。」

「ラズ、ラズか…。」

エルドはそう呟くと、嬉しそうに顔を歪ませた。

「お前達は魔法の才能がからつきしだったが、この子なら…。」
そう呟いて、エルドはラズを優しく撫でた。

「ラズ。お前なら、きつとこの本を読み解いてくれるだろう、ラズ。」

そう言ったエルドの手には、緑の革表紙に金の飾り縁が付いた分厚い本が1冊、握られていたのだった。



「僕の曾祖父は、若い頃とても強い魔法を持っていたね。S^{ランク}級はもちろん、SS^{ランク}級の魔法も少しだけだけど使えたらしい。」

ラズの言葉に、美穂奈は少し驚いた。

何故なら、SS^{ランク}級の魔法を扱える人はもういないと聞いたばかりだったからだ。

「ただ、歳と共に魔力は低下していき、晩年はA^{ランク}級の魔法を使うの

がやっとだったみたいだけど。」

ラズの祖父、エルドⅡサプレーンは若い頃、とても優秀な魔法使いとして有名だった。

SS級の魔法^{ランク}を使える事から、生きる伝説とも呼ばれていた彼は、歳と共に自分の魔力が低下していくのをとても焦っていた。

後継者のラズの祖父もラズの父も、どちらも魔法の才能はあまりなく、C級の魔法^{ランク}しか使えなかった事に、いつも嘆いていたと。

「僕が生まれてすぐ、曾祖父は僕にこの本を渡し、亡くなったそうだよ。伝説と呼ばれた曾祖父が残した本だから、魔法関連の本かと思っただけけど…。」

そこまで言って、ラズは肩をすくめた。

「読むのに凄い魔力と集中力がある割りに、中身は普通の小説だったんだよね。曾祖父が何故こんな本を僕に託し、あんなに切実に読み解いて欲しいと言っていたのか分からないぐらいね。」

「本を読むのに、魔法がいるの？」

美穂奈の疑問に、ラズは緑の本を開いて見せてくれた。

「ごらんの通り、パツと見、中身は白紙なんだ。読む時にこの本に魔力を注いでやると、その間だけ文字が浮かび上がる仕組みなんだ。」

何かの暗号かとも思ったけど、多分違うだろうと話すラズに、美穂奈はそつと自分の腕の中にある本に視線を落とす。

赤い革表紙に、金の飾り縁のある中身が白紙な分厚い本。

それが、SS級の魔法^{ランク}を使える大魔法使いと呼ばれたラズの曾おじい様が残した本と良く似ている…なんて、出来すぎている。

そして、魔法だ。

美穂奈はもちろん、魔法なんて使えない。

魔法が本当に実在し、使用されている様な世界があるというのを今知ったぐらいだ。

なのに。

美穂奈は、ここに来る少し前を思い出す。

金色の白紙のページに、たしかに浮かび上がった金色の文字を。
ラズは言った。

魔力を注ぐと、文字が浮かび上がると。
美穂奈は、魔力なんてない。

本に注いでやった記憶もない。

なのに、何故…？

「ミホナ？」

呼ばれて、ハッと顔を上げる。

難しい顔をして黙り込んだ美穂奈を心配してくれた様だ。

「あ、えっと…。」

言い淀んで、美穂奈はそっとラズに本を差し出した。

「ねえ。私のこの本も、やっぱりその魔力を注いであげると、文字が浮かび上がるのかしら？ 私は…、魔法なんてももの使えないから、ラズさえ良ければ、この本を読んでみてくれないかしら？」

「え…？ じゃあ、その本も白紙なの？」

ラズの問いに、美穂奈はこくりと頷く。

「ええ、白紙よ。何も書いてない。でも…。」

ここに来る前、私は確かに見た。

金色の文字を。

「そう言えば、ミホナはここに来る前に、その本に金色の文字が浮かび上がったって言ってたよね…。」

呟いて、ラズは少し考える素振りを見せた。

そして、美穂奈を見て、苦い顔をする。

「ミホナさえ良ければ、僕もその本は気になるし、読んでみたいとは思っただけ…。今日は、ちょっと無理かな。こっちの本を読むのに、魔力使い果たしちゃって…。」

そう言って、ラズは緑の本を掲げて見せた。

「いつもは少し余力を残しておくんだけど、後少しで読み終わると思っつい使い切っちゃったんだよね…。2〜3日あれば回復するけど…。」

「2〜3日…。」

言われて美穂奈は、当初の目的を思い出す。

ラズが言い淀んでいる原因は、多分、ラズが回復するまでの2〜3日、美穂奈はどうするの？と聞きたいのだろう。

そして、美穂奈はどうやってこの世界に來たかではなく、どうやってラズを陥落するかを悩んでいたのだ。

「忘れてた。」

眉間に指を当て、美穂奈は呟いた。

異世界ってだけで脳内キャパオーバーだってのに、魔法とかなんか色々有りすぎて、つい失念していた。

まあ、でも、これでラズには頼みやすくなった。

とりあえず、2〜3日はラズが本を読みたがってるんだし、それをエサに泊めてもらえないか交渉しよう。

「ラズ。」

「ごめん、無理だから。」

交渉しようと、顔を上げて名前を呼べば、ラズから間髪入れずにお断りの返事が返ってきた。

「……………私、まだ何も言っていないよ？」

「ああ、うん。でも、無理だから。」

「……………。」

今までお人好しすぎるぐらい、美穂奈の話を真面目に聞いてくれたいた人とは思えない程の否定っぷりである。

女の子を1人、知らない土地に放り出したりする様には見えないんだけど…。

予想外過ぎると思うつつも、だからといってここで引き下がれば美穂奈は宿無しである。

なんとかならないのかと、美穂奈も食い下がってみる。

「えっと、理由を聞いても良いかしら？私、ラズが協力してくれないと、この世界に知り合いかいないし、困るんだけど…。」

「わかってる、わかってるんだけど…。うーん…、弱ったなあ。…

「……ここ、僕の家じゃないんだよね。」
「……………え？」

原色と輪廻転生

ラズの発言に美穂奈は一瞬固まった。

簡素なづくりのそれほど大きくない小屋。

ベットや食卓らしきテーブルがある事から、勝手に居住空間だと思
い込んでいた。

そして、そんなところにいる一人の男。

当然、この家の持ち主だと思っていたのだが、違うの？

じゃあ、自分の家でもないこの小屋になんでラズはいるのだろうか？
…空き巣とか？

「あ、いや違った。えっと、僕はここに住んでるんだけど、この小
屋は僕のじゃない…っていうのが、正しいかな。」

「あ、なんだ。借家って事？でも、だからって何で駄目？」

美穂奈の疑わし視線を受け、慌てて訂正したラズに、美穂奈はホッ
とする反面、更に首を傾げた。

居住人数に依じて家賃が変わったりするのだろうか？

「ああ、うん。借家なら別に良いんだけど…。僕はちょっと特殊で
ね。」

「特殊？」

ますます意味がわからないと、美穂奈はさらに首を傾げながらラズ
を見上げた。

「あ…えっとね。僕は、その…国に保護されている立場だから。」

「保護?!」

言われた言葉に、美穂奈は驚きラズを見た。

「え、何？ラズって、天然記念物か何かなの？もしくは、人間国宝
とか？」

「あゝ、うん。どこから説明しよう…。」

そう言って悩むラズに、美穂奈は提案してみる。

とりあえず、どうしてこの家に居座っちゃいけないのかとか、保護

って何？とか、色々疑問はあるけれど。

「：そうね、ラズが良ければだけど。」

そこで一度言葉を切り、美穂奈はラズの灰緑の瞳を見つめて言った。
「最初から。一から全部、説明しれくれない？」

どうせ全部分からないのだから、この際一から全部説明してもらおう。

「急がば回れ。多分、それが一番早いと思うのよ。」



カラーズ
Colors。

それが、この世界の名前。

この世界の人達は個人差があるにしろ、皆魔法が使えらしい。

そして、その魔法を使う時にもっとも大事なものの。

それが、自分の色。

魔法を使う時に必要な魔力の色は、皆それぞれ違っており、一人として同じ色の人間は少ないそう。

ただし、例外がある。

一人として同じ色の人間は存在しないが、それは生きている人間の
間で限定らしい。

死んだ人間の色は、次にこの世に生まれてくる他の人間に宿るそう
だ。

少し、地球で言うところの『輪廻転生』という言葉に似ていると、
美穂奈は思った。

「そして、その色は、遺伝されると言われている。」
「遺伝？」

「そう。例えば…。母親が赤、父親が青の色カラーを持っていたとする。そうすると、生まれてくる子供の色は母親似の赤系統か父親似の青系統、それとその2つを混ぜ合わせた紫系統の子供が生まれるのが一般的なんだ。」

つまり、血液型みたいなものかな。

美穂奈は心の中でそう呟き、納得した。

地球にはない概念だけでも、似たような概念のものと上手く照らし合わせながら、ラズの説明を理解していく。

詳細は違いかもしれないが、今はとりあえず、大まかに分かっているれば良いと思ったからだ。

「でね、この色カラーなんだけど。特に貴重とされている色が4色あるんだ。4大原色って言って、赤・青・黄・緑は、特に強い魔力を持って生まれてくるとされている。」

「4?」

美穂奈は首を傾げた。

色の三原色。

光の三原色。

美穂奈が知る色の元というと、上記のものがすぐに浮かび上がってくるが、それはどれも三原色。

光の三原色、赤・青・緑。

色の三原色、マゼンタ・シアン・イエロー。

赤とマゼンタ、青とシアンを一緒に考えた場合、たしかに色はおおまかに4つにわけられると思うけど…。

「ミホナ?」

ラズが呼ぶ声に、美穂奈は首を振った。

「ううん。何でもないの。ごめんなさい、続けて。」

美穂奈の常識がこの世界で何になるというのか。

魔法だの色カラーだの言われているのだ。

3原色だろうが4大原色だろうが似た様なものだし、数字が1違うだけの細かい差異は無視する事に決めた。

「大丈夫？続けるよ？」

ラズの言葉に、美穂奈は黙って頷いた。

「色は遺伝だけど、基本的に色転生^{カラーてんせい}って言うのは、血の繋がりが濃いとこを好むんだ。特に、4大原色はね。だから、何代にもわたり原色持ちが生まれなかった場合、どんどん原色持ちの子供が生まれる確率が低くなってしまふんだ。原色っていうのは、魔力が高いつていうのもあるけど、他にも全ての色の源となる色でもあるから、原色の子が生まれないのは色々な色を生み出す可能性を潰す事にもなるんだよ。だから、原色持ちは国から重宝される。」

「へえ…。あ、もしかして、ラズがその原色持ち？」

だから、『保護』なんて単語が出てきたのかと納得しかけた美穂奈に、ラズは苦笑しながら首を振った。

「残念ながら、僕は原色持ちじゃないよ。原色持ちになれる可能性もなかったな。僕の両親共に緑系統だったから、僕がなれる可能性があったのは緑の原色だけど、僕が生まれた時点では緑の原色持ちはまだ生きていたから。」

「えっと。じゃあ、どうしてラズは保護されているの？」

ここまでの会話の流れからして、原色持ちだから国から重要視され保護されている。

という結論に辿り着かないのは何故なのかと、美穂奈は首を傾げた。

「私の解釈が間違ってる？」

ラズの話をちゃんと理解出来てないのかと思ったが、ラズはそれにも首を振って答えてくれた。

「いや、大体はミホナの思っている通りだよ。まあでも、別に原色持ちだからって、国に特別保護されたりはしないよ。貴重ではあるけど、閉じ込めて大事に大事にされたりとかはないから。僕の友達に、一人原色持ちはいるけど、危険な事をしてても特に国に咎められたりはしないし。それは多分ね、原色持ちが死んでしまっても、また次の原色持ちが生まれてくるだろうという考えがあるからなんだけど。『色は巡り巡って、またこの世を彩るから。』っていう言葉が

あるぐらいだし。」

それだけ原色持ちが貴重だと国をあげて思っているのに、個を尊重し、原色の血は貴重だからと、種付け様に監禁とかしない国の方針には賛成だけでも、なら何故、ラズは今原色持ちの人間に対する価値を説いたのか。

そこにはやはり、ラズと原色持ちがなんらかの繋がりを持っているからだろう。

どんな繋がりがあるのか、どういった可能性があるのか、自分ならどうする場合保護なんてするのかを美穂奈は考えてみる。

「……天然記念物。」

「え？」

美穂奈の呟きに、今度はラズが首を傾げた。

「そうよ、やっぱりラズは天然記念物なんじゃないかしら？」

パツと顔を上げた美穂奈に、ラズは眉尻を下げながら深く首を傾げてみせた。

「うんと、ミホナ？君がどこに着地したのか僕にはさっぱり分からないんだけど……？」

「天然記念物よ。知らない？この世界にはないのかしら。」

その言葉にラズが頷いたのを見て、また少し考えた美穂奈はニッコリと微笑んだ。

「じゃあ、今度は私の番ね。私の解釈が正しいかどうか、ラズに聞いてもらいたいわ！」

魔法も色も、4大原色も、色転生も、何一つとして分からないけれ

ども、ここまで説明をうけたのに、ただ最後に答えを聞いて終わりののは何だか悔しい気がした。

ちゃんと、自分が出した結論があっているかの答え合わせをして欲しい。

だから、いきなりどうして立場が逆転したのか分からずオロオロしているラズを見て、美穂奈はもう一度ニッコリと微笑んだのだった。「こうなったら、最後まで付き合ってね、ラズ。」

その有無を言わさない迫力の笑顔に、ラズは少しの間の後、無言で頷いたのだった。

解釈と野宿

「これは今までのラズの説明を聞いての推測だけでも。」

美穂奈はそう前置きをして、ラズの方へと目を向けた。

「ラズが生まれてきた時、緑の原色持ちの人はまだ生きていて、ラズの曾おじい様はとても強い魔力を秘めた魔法使いだったって事から、私はラズの曾おじい様の色が緑の原色カラーだったんじゃないかって思っているの。で、その原色持ちの曾おじい様は亡くなられた。すると、次に緑の原色持ちが生まれてくる可能性が高いのは、ラズの家系だって事。一番可能性として高いのは、ラズのおじい様世代の子供だけでも、曾おじい様が亡くなられた後に子供を授かるのは年齢的にアウト。次に可能性として高いのはラズのお父様世代だけでも…。ラズ、弟や妹はいる？」

「…いや、一人っ子だけど。」

突然始まった美穂奈の解釈に質問。

驚きながらも、ジッとこちらの返事を待つ美穂奈にラズは答えた。

「おじ様やおば様はいないの？」

「父も母も一人っ子だったから。」

その言葉に、美穂奈はピッと人差し指を立てた。

「と、いう事は。次に原色持ちが生まれる確率として高いのはラズの世代。ラズの子供って事になる。ラズの曾おじい様にご兄弟がいる場合、そちらの家系に原色持ちの子供が生まれる可能性もあると思うけれど、多分もう亡くなられてるんじゃないかしら？で、お子様もいない。違う？」

「……あってるよ。」

ラズは少し感心しながら頷いた。

1から説明して欲しいと言った美穂奈に、ラズは本当に最初から説明した。

けれど、説明はまだ半ば、美穂奈が知りたがっていた何故この家に

置けないのかや、保護とは何かに対しての答えにはまだ何も触れていなかった。

なのに、美穂奈は確信に近付いていると、ラズは美穂奈の説明を聞きながらそう感じていた。

「間違っていたら本当に不吉な事言って申し訳ないんだけど、ラズの両親だけでなく、ラズの家系の人って、みんな亡くなられたんじゃない？で、残っているのがラズだけ。他の緑系統の家系から緑の原色持ちが生まれる可能性はゼロではないけど、ほぼゼロと同じ。何故なら、色、特に原色は血の繋がりを強く求めているみたいだから。原色持ちは貴重で絶対生まれてきてくれなくては困るから、ラズには是が非でも子供をつくって欲しいって事で、国の監視下に置かれているんじゃない？」

つまりは、数が多い間は放置される動植物達も、数が減り、希少価値が上げれば保護される。

ラズはまさしくその状態なのではないかと、美穂奈は解釈したのだ。どう？違う？と自信満々でこちらを見る美穂奈に、ラズは小さく手を叩いた。

「凄いね。ほぼ完璧だよ。あれだけの説明で良くそこまでわかったね。」

ラズが褒めると、自分の解釈があっていた事が嬉しかったのか、美穂奈が嬉しそうに笑った。

…少し、似てるかな。

ラズは美穂奈のその表情を見て、ふと原色持ちの友達を思い出した。聡明な友人の顔を。

「僕の両親は事故で亡くなってね。曾祖父の世代ぐらいから、子供は1人産まれるか産まれないかぐらいだったんだ。親戚がない事はないんだけど、みんな結構な歳だし、子供は望めないかな。」

「まあ、そうよね。出来ないことはないけど、高齢出産はリスクが高いものね。」

ラズの言葉に美穂奈は頷いた。

「そういう理由から、僕は国の保護を受けていて、不定期にやってくる国からの使者に、定期報告するのが義務なの。だから、悪いけどミホナ。君をこの家に泊めることは出来ないんだ。」

ようやく戻ってきた話の流れに、美穂奈は頭を悩ませる。事情はわかった。

けれど、やはりこの家に置いてもらえないのはマズイ。

美穂奈が今この世界で頼れるのは、ラズだけなのだから。

「……どうしても駄目？」

「駄目だよ。僕だって、泊めてあげたいのは山々だけど。……ミホナ、考えてみて。僕が何で国の監視下に置かれているか。」

「え？ えっと、だから……緑の原色持ちが産まれてくる可能性を高める為に、血筋の濃いラズを保護してる……のよね？」

先程証明したばかりの話がまたぶり返してしまった事に首を傾げながら美穂奈は答えた。

「そう。で、子供をつくって欲しくて仕方がない国からの使者がこの家に来たら、僕はいつの間にか女の子と暮らしてるんだ。どう思われる？」

「どうって……。」

想像して、美穂奈は少しだけ頬を染める。

「そうね、そうよね。そういう話になるわね。逃げられないぐらいそっち方面に話が進んで、やらなきゃいけないわね。」

国はきつと諸手をあげて私とラズの同居を認めてくれるだろう。

この小屋だって、もっと広くして、ベッドもダブルにしてくれるだろうけど、そこまでされたら是が非でも子供をつくらなきゃいけなくなるのは目に見えている。

さすがにそれは遠慮したい。

「あーもう。でも、どうしたら良いのよ。こんな知らない世界でいきなり1人で暮らしていけって言われても無理よ……。あ、そうだ。ラズ。ちょっと聞きたい事があるんだけど。」

「何？」

「この世界って、住民登録とかいるの？えっと、身分証っていうか…、そういうのないと、やっぱりこの世界で働いたりするのも難しかったりする？」

美穂奈の言葉にラズは首を傾げたが、すぐに何か思い当たったのか

「ああ。」と頷いた。

「色登録カラーの事かな？自分の色カラーが何色なのか、国に報告する義務はあるね。」

言われて美穂奈は大きな溜息を吐いた。

ここでもまた色カラー。

大事なものはわかったけど、そんな登録までしなくても良いじゃないと美穂奈は心の中で愚痴ってみた。

「もちろん、ミホナは異世界から来て、魔法も知らなかったみたいだから、自分が何色かなんて知らない…よね？」

「知るわけないわ。」

答えて、また溜息。

美穂奈は、これからの事を考え頭を悩ませていた。

頼みの綱であるラズは、この通り駄目。

なら、美穂奈は一体誰を頼りにすれば良いというのか。

右も左もわからない、異世界で、頼れる人間なんている訳がないのに…。

ふととなしに、美穂奈は小屋の窓から外を見る。

たくさんの木々が生い茂る森を見て、美穂奈は暫し考え、何か思いついたと言わんばかりに手を打ちラズを見た。

「ラズ！お願いがあるの！！」

「だ、駄目だよ。ミホナがなんと言っても、泊められないからね。」申し訳なさそうに、首を振るラズに、美穂奈も同じく首を振った。

「違うわ。泊まるのは諦める。だって、しょうがないじゃない。さすがに、子作りしましょとは言えないわよ…。ただ、そのかわり、毛布か寝袋を一つ貸して欲しいのよ。」

お願いと手を合わせて拝む美穂奈に、ラズは訝しげに眉をしかめた。

「毛布を貸すのは別に構わないけれど…。ミホナ、それで一体どうする気？」

ラズの言葉に、美穂奈は外を指差し答えた。

「野宿するのよ。幸いにも、目の前に森があるし、隠れて潜むには打って付けでしょ？で、その間に解決策を見つけるわ。」

見つかるかは分からないけれど、と口の中で小さく呟く美穂奈に、ラズは呆れた様な盛大な溜息を吐いた。

「ミホナ、君は女の子なんだよ？」

「わかってるわよ。」

ラズに言われずとも、自分が女であることはわかっているつもりだと、美穂奈は頷いた。

「わかってないよ。女の子が森の中で野宿とか、何考えてるの！」

「だってしょうがないじゃない！他にどうしろって言うのよ！！この小屋に泊めてくれないなら、変に優しさ見せないで！！」

美穂奈の言葉に、ラズはぐうの音も出ないのか、黙り込む。

「…可哀想だと思うなら、たまに食べ物とか恵んでくれると助かるわ。」

森の中って何か果物とかあるのかなとか、野宿する気満々の美穂奈に、ラズは先程よりも大きな溜息を吐いてみせた。

「……………わかった。良いよ、泊めてあげる。」

たっぷり数十秒の間の後、ラズが呟いた言葉に、美穂奈は驚いて振り返った。

「何言ってるの、ラズ。私、あなたと夫婦になって子供作る気はないわよ？」

「わかってるよ、僕にもない。国には…、なんとか適当に誤魔化しておくから。」

「…なんて言って誤魔化すのよ。」

美穂奈のその言葉には、ラズは答えず視線をそらした。

つまり、行き当たりばったりらしい。

ラズはどちらかというと、計画的に動くタイプの人間に見える。

そういう人間が考えなしに動くとは大抵失敗することを、美穂奈は知っていた。

「ラズ、嬉しいけどちょっと無謀じゃない？逃げられなくなったら、仕方がないからって理由で子作りとか、ラズだって嫌でしょ？」
「でも…！」

“バンッ”

ラズがそれでも何か言おうとした瞬間、唯一の小屋の出入り口である扉が勢い良く開けられ、ラズと美穂奈は固まった。

まさか、国の使者？

間が悪過ぎる、心の準備が出来ていない、なんて言って誤魔化そう、そんな考えを頭の中でぐるぐる回しながら、美穂奈とラズはゆっくりと、扉の方へと視線を向けたのだった。

来訪者と口論

振り返った先にいたのは、ラズと同年ぐらいの、顔立ち整った金髪の青年だった。

その青年は、美穂奈とラズを見て、訝しげな顔をした。

「リング！脅かさないでくれよ！！」

隣に立っていたラズが、大きな声でそう言って安堵の溜息を吐いたのを見て、美穂奈も緊張で強張らせていた体の力を少しだけ抜いた。とりあえず、国からの使ではないようだ。

ラズの知り合いだろうか？

美穂奈がそう思っていると、リングと呼ばれた青年は、不機嫌な顔全開でこちらを睨んで、怒鳴った。

「それはこっちのセリフだ！ラズ、てめー、何やってんだよ！！」
つかつかとラズとの距離を縮めたかと思うと、リングは勢い良くラズを蹴飛ばした。

「ちよ、何するのよ！」

その行動に美穂奈が抗議の声を上げれば、リングは今度は美穂奈を睨んだ。

「んだよ、つかおまえは誰だ？ラズとこの小屋に一緒にいるっていうのが、どういう意味かわかってんのか？！」

「リング！」

ラズの制止の声も無視し、リングは美穂奈を睨むことを止めなかった。

美穂奈はその眼差しを真っ向から受け止め、頷いた。

「ラズから説明は受けたし、わかってるつもりよ。」

「ほお。じゃあ、おまえとラズはそういう関係なんだな？」

「違うわ。ここにいるのは、やむを得ない事情があったからよ。もう出て行くわ。」

言って、美穂奈はラズを振り返った。

「ラズ、迷惑をかけてごめんなさい。この毛布、一枚貰うわね。」
ベットに置いてある毛布を一枚手に持ち、出て行こうとする美穂奈の腕をつかみ、ラズは慌てて引き止めた。

「ミホナ、だから駄目だって！僕がなんとかするから、ここに泊って…！」

「ふざけんなよ、ラズ！おまえ、女をこの小屋に泊めるとか、正気か？！」

「リング、これには深い事情があるんだよ。あ、ええっと…。」
言い淀んでチラリと美穂奈を見れば、呆れた溜息が返ってきた。

「ラズ、目の前の知り合いも誤魔化せないのに、国からの使者を誤魔化せる訳ないでしょ？」

正論過ぎて言い返す言葉もない。

「とにかく、放してラズ。次、この小屋にやってくる人間が国からの使者じゃないって保証はないでしょう？」

「ラズ。もちろん、俺が納得いく説明をしてくれんだろうな？」

ラズの腕を振り解こうとする美穂奈に、状況を説明しろとうるさいリング。

美穂奈を引き止める方法を考えなくてはいけないし、リングにこれまでのことを説明しなくちゃいけないし…。

でも、ラズは一人で、同時に説明なんて出来なくて、なのに美穂奈もリングも待つてはくれない。

考えをまとめようとするのに、右からは美穂奈が腕を放してと訴え、左からはリングが説明しろと怒鳴っているので考えがまとまらない。上手いかなない苛立ちが募っていき、ラズはどうとう我慢しきれず怒鳴った。

「…っ！ああ、もう！2人共、ちょっと黙ってくれないかな！考えがまとまらないだろう…！」

瞬間、あんなにうるさかった美穂奈もリングも驚いたように目を見開き、2人そろっておとなしく口を噤み頷いたのだった。

「はい。」



おとなしい人ほどキレると怖い。

そんな言葉を思い出しながら、美穂奈は椅子に座り、ラズに言われた通り、静かにおとなしくしていた。

その隣では、ラズがリングにこれまでのあらすじを説明しており、時折リングが美穂奈の方を胡散臭そうな目で見ていた。

良い気分ではないが、リングの反応は正常だと美穂奈は思った。

大体、ラズは美穂奈の言った事を全て素直に信じ過ぎだと思うからだ。

実際嘘ではないけども、もし美穂奈が逆の立場であったなら、いきなり自分は異世界からやってきて、一般常識の魔法についていちいち頭にハテナマークを浮かべ、分からないとか言ってる奴がいたら「この人、頭大丈夫かしら？」と怪しい者を見る目で見ると決まっているからである。

リングも美穂奈と同じ事を考えたのだろう。

大きな溜息の後に、ラズの方へと向き直るリングを横目に美穂奈は2人の会話に耳を傾けた。

「おまえな…。その話をまるっとそのまま信じたのか？馬鹿じゃないのか？」

「でも、実際急に目の前に現れた訳だし、少なくとも嘘を言ってる様には見えなかったし。」

「嘘吐く人間はみんな嘘吐いてる様には見えなんだよ！大体、おまえ女は嫌いだったんじゃないのかよ、この裏切り者！」

「嫌いだなんて言った事ないよ。ただ、色^{カラー}遺伝の事で保護とかされ

てから、少し苦手になったって言っただけじゃないか。」

「同じ事だろう！それなのに、行くところがないってちょっと泣きつかれたぐらいで泊めるとか、マジありえねえ。」

「だって、しょうがないだろ。でないと野宿するって言うし。」

「させとけよ、野宿だろうがなんだろうが！毛布一枚恵んで放り出せ！！」

「相手は女の子なんだよ？出来る訳ないだろ。」

「女だから何だって言うんだよ。大体、女ってのは虫よりしぶとくできてんだよ。今は冬でもないから凍死の心配もないし、毛布も一枚恵んでやるんだ。外に放り出したぐらいじゃ死なねーよ、俺が保証してやる！！」

「リングは乱暴過ぎるよ。」

「うるせー！つか、おまえがその女を泊めるってんなら、俺はしばらく来ないからな！」

「え、何で？！来てよ！僕だって、さすがに長時間2人っきりは辛いよ！！」

「なら、追い出せ！俺が女嫌いなもの知ってんだろ！！俺は、おまえと違って、苦手じゃなく、嫌いなんだ！！」

「…………ホモ？」

呟いてから、しまったと思った美穂奈は慌てて口をふさいでみたが、どうやら遅かった様だ。

リングが物凄い形相でこちらを睨んでいる。

「ミホナ…。」

ラズが何で喋ってしまったんだと言いたげな視線を投げかけてくるのに、美穂奈は素直に謝った。

「ごめんなさい。あまりにも必死になって主張するからつい…。どうして、そんなに邪険にするの？」

女の子って良いよ、最高だよ！とは言わないけれども、そこまで嫌うには何か理由があるんじゃないだろうか？と、ちょっとした好奇心で美穂奈はリングに問いかけてみた。

けれど、リングは美穂奈を睨むだけで、一向に答えてはくれない。女なんかと喋れるかって事なのかな？

いくら嫌いだからって、無視されるのはちょっと腹が立つ。

美穂奈自身がリングに何かをした訳ではないのに。

「……………大した理由もないのに、そういう事言うって事は、ラズと2人つきりになりたいのについて解釈で良いかしら？」

「……………っつ！！」

だから美穂奈は反撃に出てみた。

「ミホナ！」

ラズの咎める様な声が聞こえてきたけども、無視をする。

だって、やっぱり何もしてないのにこの態度は腹が立つから。

美形に睨まれると迫力があって怖いけど、ここで目を逸らして負けるのは癪だから、美穂奈はリングの瞳を真っ向から受け止めた。

「ツチ！自分は非力ですって顔で近付いてきて、守るだけ守ってもらって、こっちから取れるものは取れるだけ奪ってく。そんな生き物のどこが好きになれる？」

観念したのか盛大な舌打ちの後に答えてくれた理由は、女の子の本質を良く見抜いた良いコメントであると、美穂奈は思った。

けれど。

「それが全てだと思っているなら、まだまだ甘いわね。一度騙されただぐらいで。」

「こんの…！！！」

「よせ、リング！相手は女の子なんだぞ！？」

今にもつかみかかってきそうなリングにラズが間に入って咎める様に言う。

「だから何だ！その言葉は聞き飽きたってんだよ！！つか、おまえは何だかんだ言って女に甘いんだよ！」

怒鳴りすぎて酸欠なのか、リングはそこで一度言葉を切ると肩で息をしながら、呼吸を整えた。

「とにかく、俺はその女がいる限り、ここには来ないからな。」

「酷いな、友達が困ってるのを見捨てるなんて。」

「ぬかせ。その友達の嫌がる事をするとか、とんだドSだろ。」
友達。

その単語に、美穂奈は1つ誰ともなしに頷いた。

どちらかというところ控えめなラズが、先程から言いたいことをビシバシ言っているのに、納得がいったからだ。

逆に、性格が真逆なリングと友達だという事に驚く。

ラズの見た目が文化系の優しい優等生って感じだから、きっとラズと付き合いのある人間もそういうタイプが多いんじゃないかと思っただけだ。

が、リングはどちらかというと乱暴な不良タイプだ。

上手くいくとは到底思えないのだが、今までのやりとりを聞いている分に、なんだかんだで釣り合いが取れているのかもしれない。

「とにかく、女の子。しかも、異世界から来たって言ってるんだ。身寄りも頼れる人もいないんだ。追い出すのはいくらなんでも可哀想過ぎるだろ。」

「そもそも、俺はその『異世界』を信じてねー。怪し過ぎるだろ。むしろ、何でおまえは信じちゃってるのかが謎だ。」

頭が痛いと言っても言いたそうに、リングは額に手を当て、頭を振った。
「だいたい、おまえはこの状況をどう国に説明する気なんだよ。言っとくが、奴等は俺以上に異世界とか信じねーからな。」

「それは……その……」

言い淀んだラズに、リングはますます頭が痛い眉間に皺を寄せた。
「ラズ。おまえはどっちゃかつつーと物事を順序立てて考え行動するタイプの人間だろ。そういう人間は、不慮の事故に遭遇した場合に弱いんだよ。今ここで言い訳の1つや2つ出てこないようじゃ、本当に国から問いただされた時、何も言えないままだぞ。」

同じ事を思ってるし。

美穂奈はリングの言葉に、何とも言えない気持ちになった。
こんな乱暴者と考えが似てるとか、嫌……とまではいかないが複雑過

ぎる。

「たしかに、リスクは大きいけれど。でも、気になる事もあるし。ミホナを泊めるのはデメリットばかりじゃないと思うんだ。」

「気になることだ？」

「ミホナ。」

呼ばれて、美穂奈はラズが気になると言っている物をリングに見せた。

赤い革表紙の金の飾り縁が付いた分厚い本。

「ミホナは、この本に金色の文字が浮かび上がった次の瞬間にここに来たと主張している。ミホナがここに来てしまった原因になるかもしれないその本が、僕が持っている曾祖父の形見の本とそっくりで、しかも僕がその形見の本を読み終わった直後、ミホナは目の前に立っていた。これは、偶然というには少し出来過ぎていると思うんだ。」

言われて、リングは美穂奈の手の中の本を見る。

リングもラズが読んでいるところを何度も見たことがある。

緑の革表紙に、金の飾り縁。

「たしかに、似てるな。」

色違いの同じ物だろうと切り捨てないのは、ラズの持っている本が既製品ではなく、あの大魔法使いエルドの形見だと知っているから。

「借りても良いか？」

リングの言葉に、美穂奈は黙ってリングへ本を差し出した。

リングはそれを受け取ると、パラパラとページをめくる。

「ミホナの本もページは真っ白だから、僕と同じ魔力を注いであげて読めるんじゃないかなと思うんだ。今日は魔力を使い果たしちゃったし、回復したら読んでみようかと思ってるんだけど…。」

「いや、無理だろ。」

ラズの説明をぶった切り、リングは美穂奈の本をパタンと閉じた。

「え？無理って、どういう事？」

意味がわからず、美穂奈はリングとラズの顔を見る。

が、ラズもリングに言われた言葉が意外だったのか、不思議そうな顔をしていた。

「ラズ、おまえは自分の本を普通に読めるから忘れてるみたいだけどな。おまえの本とこの本が同じ性質の物だった場合、おまえにも俺にも読めねー、つかこの世界で読める奴がいるかが怪しい。」

「……………あ。」

リングの言葉に、ラズは何か思い当たったのか小さく声を漏らした。

「いや、でも！あり得ないよ、リング。」

「…ど、どういう事？」

何か焦った様なラズの声に、美穂奈も何だか不安になってきてそう問いかける。

「つか、それはこっちのセリフだな。」

だが、その問いに答えたのはラズではなく、リングだった。

リングは、美穂奈と目線を合わせる様に腰をかがめると、至近距離で美穂奈を値踏みする様に見つめ、言った。

「…おまえの色は何色だ？」

魔法道具と制約

「何色って、言われたって…。」

リングの瞳から逃げるように、美穂奈はラズを見た。

「…リング。ミホナは魔法のない世界から来たんだ。魔法も、色も知らないらしい。もちろん、自分の色^{カラー}もね。」

「それは、知らないだけ…だろ？」

リングの言葉に、どういう事だと美穂奈は眉根を寄せた。

「魔法を知らねーつつう設定らしいから特別にいちから教えてやるよ。」

ラズの時とは違う、嫌味としか思えない言い方。

けれど、知らないのは事実で、ちゃんと順序立てて説明してくれるのは有り難い事だから、美穂奈は文句を飲み込み、何も言わずにリングを見た。

「ラズの持つてる緑の本は、ラズの曾祖父であるエルドが作ったものだ。読む時に読み手の魔力を注いで文字を出現させる特別仕様魔法道具^{マジックアイテム}に分類される。」

リングはラズの緑の本を取り、その表紙を開きながら続けた。

「…魔法に級^{ランク}があるのは知ってるか？」

聞かれて、美穂奈は一つ頷いた。

「ラズに、聞いたから。」

「そうか。じゃあ、そこは省く。」

リングはあっさりとそう言うのと、魔法道具^{マジックアイテム}についての説明を続けた。

「魔法に級^{ランク}があるのと同じで、魔法道具^{マジックアイテム}にも級^{ランク}が付いている。S級^{ランク}からC級^{ランク}の4段階だ。魔法道具^{マジックアイテム}ってのは、使う時に大抵制約が付いていることが多いんだが、この級が高ければ高いほどややこしくて面倒臭い制約が付いていることが多い。ラズの持つてるこの本はA級^{ランク}で、ご他聞に漏れず、面倒臭い制約が付いている。」

言って、リングは緑の本に向かって、何事か小さく呟いた。

「ミホナ！」

ラズに呼ばれ振り向くと同時に、急に腕を引かれ、美穂奈はバランスを崩しながらラズの腕の中に収まった。

“バヂイイ！！”

その直後、鋭い音が耳を刺し、美穂奈は驚きに体をビクリと震わせる。

何が起きたのかと恐る恐る顔を上げれば、リングの手の中の緑の本からバチバチと光る緑色の電気の様なものが見えた。

「リング！ミホナに当たったらどうするんだ！！」

「知るか。適当に避ける。」

ラズの抗議の声を適当にあしらいつつ、リングは美穂奈を見た。

「この本の制約は、ランク色。マジックアイテムこの2つ自体はそれ程珍しい制約じゃない。魔法道具を使う際の制約は大抵この2つのどちらかだからだ。ただ、この本はその両方が制約にあり、しかも縛りがキツイ。ランク級制約いやくつてのは、簡単に言えば魔法道具と同じ級の魔力を注ぎつて事だ。この本の級はA。ランクつまり、A級以上の魔力を注いでやらないと文字は浮かんで来ない。B級や、C級しか使えない魔法使いじゃ中身が読めないって事だ。」

A級以上。ランク

ラズの説明でS級ランクの魔法を使える者はほんの一握りだけだと聞いた。つまり、A級ランクの魔法を使える人間もそんなに多くはないだろう。

それだけでも、A級以上という縛りはなかなかに厳しいと美穂奈は思った。

「色制約カラーせいやくつてのは、該当する色カラーを持つ者でしかこの魔法道具マジックアイテムを使えないって事なんだが…。色カラーの種類については聞いたか？」

「…4大原色についてなら。」

美穂奈の答えに、リングは面倒臭そうに髪をかき上げた。

「ああ、そうか。原色だけか。クソ、話があちこち飛びやがる。」
説明の説明をする事に、リングは煩わしいとばかりに髪をかく。

「原色が4種しかないのに対し、色カラーの種類は割と多い。というか、

正確には原色からの派生色なんだけど。」

「いまいち意味がわからないと美穂奈が頸を傾げると、ラズが横から口添えしてくれた。」

「例えば、さつき色^{カラーいでん}遺伝の時に、母親が赤で、父親が青でって例え話したでしょ？その結果、産まれてくる子供が紫^{カラー}の色を持つてる。つまり、紫は赤と青の派生色って事。でも、紫にも色々あるよね。」

「紫だけでも、母親よりの遺伝だと色は『赤紫^{カラー}』に、父親よりだと『青紫』になる。この場合は、どっちの派生色かハッキリしててわかりやすいけど、母親と父親両方五分の遺伝だった場合、赤と青、どちらの派生色か難しいよね。その場合、その子供は赤系統なのか青系統なのか分類するのは難しい。」

ラズの説明に、美穂奈はなるほどと頷いた。

「そう。だから、原色とは別に色に種類^{カラー}を設けた。赤系統・橙系統・黄色系統・緑系統・青系統・紫系統・茶系統・灰色系統・黒系統・白系統。他にも水色だの桃色だのあるが、今はこれだけわかれば充分だ。」

リングはそう言うのと、本に関する説明に戻った。

「大体の魔法道具^{マジックアイテム}の色制約^{カラーせいやく}っていうのは、少なくとも2種以上ある。例えば、緑系統の色もしくは赤系統の色^{カラー}のどちらかでって感じた。

そして、その場合の複数は何らかの法則性がある。例えば、補色であったり、同系色であったり、暖色・寒色であったり。……補色とかはわかるか？」

さすがにそれは美術で習ったと、美穂奈はリングに頷いてみせた。

「補色は、お互いの色を引き立てるもの。同系色は色相環で隣り合う色。暖色は赤系統や橙系統で、寒色は青系統や紫系統でしょ？」

美穂奈の答えに、リングは頷いた。

「シキソウカンが良くわからねーが、まあ大体あってるし、進めるぞ。」

リングは緑の本の表紙をパンと軽く叩いた。

「だが、この本の色制約^{カラーせいやく}は『緑系統の色^{カラー}』のみなんだ。他の色持^{カラー}ち

が本を読もうと魔力を注ぎ込むと、さっきの様な事になる。」

「さっき？……あ。」

言われて、美穂奈は先程の鋭い音を思い出した。

「この本には、違う色カラーの魔力を注がれた場合、攻撃してくる仕組みになってるな。まあ、相殺したけど。」

だからラズは慌ててかばってくれたんだと知り、美穂奈がラズの顔を見上げれば優しい笑みとかち合い、美穂奈は勢い良く顔を下に向けた。

：リングではないが、女の子が苦手と言う割に、ラズはうっかりときめいちゃうくらい女の子に優しいと思う。

「：聞いてんのか？」

美穂奈の態度が気に入らないのか、低く凄んでくるリングに、美穂奈は大きく頷いた。

「大丈夫！聞いているわ！！続けて！！！」

美穂奈の言葉に、ラズは頸を傾げ、リングは特大の溜息を吐いた。

「でだ、ここからは俺の推測だが。この本の2つの制約のうち、色カラー制約「せいやく」の定義がおかしい気がすんだよ。さっきも言ったが、色制約カラーせいやくつてのは、大体、対になる何かしらカラーの色が存在する。単色でって前例がないんだ。今日この日まで、エルドが作った本だし、例外なのかなと思っていたんだが、おまえが持つてるその赤い本を見て思った。この緑の本と赤い本の魔法道具マジックアイテムは元は1つの魔法道具マジックアイテムなんじゃないかってな。緑の補色は赤だ。その本の革表紙の色とも一致する。」

言われてみれば、色が違うだけで全くと言って良いほどよく似た本だ。

『対』であったと言われても、納得がいく。

美穂奈は赤い本を見た。

魔法のない地球にいた時から、誕生日になると現れた不思議な本。

この本は、何故美穂奈の前に現れたのだろう。

「だがな。」

と、まだ続いていた説明に、美穂奈は本から視線を外し、リングを

見た。

すると、先程美穂奈に「何色だ？」と聞いてきた時と同じ鋭い視線に射抜かれた。

「この仮説が正しかったとして、その本を縛る制約はA級以上の赤系統の色、魔力を注ぐ事。おまえが、その本に金色に光る文字を見ただとしたら、おまえはその本に魔力を注いだんだ。：A級以上の赤の色をな。」

リングの鋭い視線に、尻込みしそうになるのをなんとか堪え、美穂奈は答える。

「私は魔法なんて使えないって言ってるでしょ。たとえば、無意識のうちに魔力を注いだとしても、A級とか、この世界の人間だって使える人がそう多くない難しい魔法、無意識で使える訳ないじゃない。」

その美穂奈の言葉に、リングは口角を緩め、笑った。

「そうだな。無意識で使うには難易度の高い魔法だ。が、それもおまえの色次第だ。」

「ど、どういう意味よ？というか、あなたは信じてないでしょうが、私は異世界から来たのよ。色自体ないわ。」

「じゃあ、どうやって本の文字を出した？」

「それは…。本自体に魔法が定着していたとか？」

そんな事があるのかどうかも知らないけども、美穂奈が適当に答えると、リングは面白そうに笑った。

「まあ、その可能性もない訳じゃないが、ほぼゼロだ。その場合、この本に魔法と魔力を定着させなきゃいけない。しかも、長い年月。それだけで、魔法道具の価値が一気にA級からS級…、いや下手したらSS級に跳ね上がる。エルドがこの本を作ったのは晩年になってからだ。全盛期ならまだしも、いや、全盛期でもそれだけのものが作れたか怪しい。それ程、おまえが言ってる理論は難しいんだよ。」

何も言い返せない美穂奈に、リングはさらに続けた。

「異世界から来て色カラーなんて持ってないと主張したいなら、おまえに色カラーがあるって『例え』で話を続けようぜ。例えだよ、俺の推測だ。」
言い方はむかつくが、たしかに今ここで色カラーがあるかないの水掛け論を
していては話が進まない。

美穂奈はリングの例え話に乗ることにした。

「おまえの色カラーがうっかりこの本に流れ込み文字が浮かび上がったとして、その場合のおまえの色カラーは赤系統だ。だがな、ここで1つ問題がある。この世界で赤系統つつたら、数百年前に途絶えたとされているんだよ。」

「…え？」

ど、どういう意味だと美穂奈はラズを見上げた。

「僕と同じだよ。赤の原色持ちが死んでからいくら待っても、次の赤の原色持ちが産まれて来なかったんだ。そうこうしているうちに赤系統の色カラーを持った一族は皆死んでしまい、血脈が途絶えた。それから、数百年、赤の原色持ちは未だに産まれてこないことから、赤の原色持ちは途絶えたと言われている。」

「そう、だから国は緑の原色持ちが同じ運命を辿らぬ様、必要以上にラズを保護する訳なんだけどな。赤系統の色カラーは途絶えたつつても、一応派生色の桃系統や橙系統は無事だから、完全に赤の原色持ちが産まれてくる可能性が途絶えた訳でもないんだが。」

それでも、ラズの説明では原色は特に血筋の濃い場所を選ぶと聞いた。

何百年も経ってしまったら、濃いもへったくれもない。

可能性は、ゼロと言ってしまっても良いぐらいに低いのだろう。

そんな貴重な色カラーが、私の色カラーかもしれないの？

「おっと、まだ納得するなよ。」

リングの声に、まだ何かあるのかと美穂奈は眉間に皺を寄せた。

「色制約の謎が解決しても、級制約の謎がまだだろ。」

「…そうね。もし仮に私に魔法の才能があったとして、色カラーが赤系統だとしても、A級以上の強い魔法が使える可能性は低いわ。」

美穂奈の言葉に、リングは頷く。

「そうだな。でも、可能性が1つだけある。」

「リング。でもそれはいくらなんでも突拍子もなさ過ぎるよ。」

リングの可能性に、ラズは気付いているのかそう抗議するのを見て、美穂奈もその可能性とやらを考えて見る。

強い魔法を使える可能性。

無意識レベルでも、強い魔法が使える天性的な強い魔力…。

「…まさか。」

「馬鹿ではないみたいだな。」

リングの初めての褒め言葉に、「けれど」と美穂奈は首を振った。

いくらなんでもありえなさ過ぎる。

カラーぶんせき

「もちろん、ちゃんとした色分析もしてないし、あくまで俺の推測、想像だ。けれど、割と高い確率でおまえの色は、カラー途絶えたとされている赤の原色である可能性が高い。」

原色。

それは、生まれながらに強い魔力を宿しているとされる全ての色カラーの元となる4つの色。

赤・青・黄・緑。

その中で、既に途絶えたとされる赤の原色。

原色は、血の繋がりの濃い場所を好む。

では、美穂奈の体に流れている血は、どこかで元赤の原色持ちと繋がっているのだろうか？

わからない。

自分の身に流れているその血の正体がわからず、美穂奈は恐怖にただただ自分の体を抱き込むようにして、目を閉じたのだった。

本の色と魔法の色

「ミホナ、大丈夫？」

ラズの声に、美穂奈はゆっくり目を開けた。

「顔色、悪いよ。」

「…大丈夫。」

答えて、美穂奈はリングを見た。

この際、自分の色カラーが赤だろうが青だろうが、それはどうでも良い。けれど、原色、血の繋がりの濃い場所を好むとされている原色カラーが自分の色だというのは、どうしても賛同出来ない。

だから、美穂奈はリングの言う可能性をどうにかして打ち砕けないかと口を開いた。

「…私が、赤の原色持ちの可能性より、この本に魔法や魔力が定着マジックアイテムしていて、魔法道具としての価値、級ランクがSS級だランクって言う方が可能性として高いんじゃない？」

「ま、そうだな。この本の級ランク自体がもっと上である可能性。この本は実はラズの持つてる本と対でもなんでもなく、ただの本の可能性。対だったとして、色制約カラーせいやくが赤系統でない可能性。おまえが異世界の人間だカラーって言うなら、おまえの世界で色カラーという概念がないんではなく知らないだけでみんなが色を宿していた場合、おまえが赤系統であつてもおかしくない可能性。あげたらキリがない。まあ、いくつかの可能性なら今ここで潰せるが。」

言って、リングは美穂奈の赤い本を手を取った。

「ミホナ！こっち来て！！」

ラズに腕を引かれ、美穂奈はラズの背の後ろへと隠れる。

その動作に、リングがまた本に魔力を注いでみるのだと理解した。

「俺の色カラーは黄色。この本の色制約カラーせいやくが、黄系統の色カラー以外だった場合、もちろん本は読めない。で、この本がラズの本と対だった場合、多分さっきみたいに攻撃されるだろう。その時の、攻撃魔法の色を見

れば、この本自体の色^{カラー}がわかる。」

「：どういう、意味？」

不安からか、知らずラズの服の裾を握り聞く。

「さっき、ラズの本に攻撃された時、見たか？緑色の電撃みたいな
の。」

言われて、美穂奈は頷いた。

バチィイと鋭い音の後、本の周りには、緑色に光る電気みたいなもの
が走っていた。

「魔法を使うには、自分の色^{カラー}で魔力に練り、それで律を編む。難し
く考えず、自分の色^{カラー}が、魔法にも影響を与え色^{カラー}がつく程度に思っ
てろ。俺の色^{カラー}は黄色だから、俺が使う魔法はみんな黄色に色付く。」

言って、リングは本を持ってない方の手で、宙に何かを描くように
指を滑らせた。

瞬間、小さな黄色い火がついた。

「わかるか？ラズが同じ魔法を使えば緑の炎になる。」

言って、リングが手を握ると、黄色い火はあっという間に消えてし
まった。

「それと同じで、魔法道具^{マジックアイテム}自体にも色^{カラー}が存在する。基本的には作っ
た人間の魔力を元に構成される訳だから、作成者と同じ色^{カラー}になる。
ラズの本であれば、エルドが作ったものだから、緑系統の色^{カラー}だな。
おまえの赤い本が、エルドの作ったこの緑の本と対の場合、エルド
の色^{カラー}である、緑系統の色^{カラー}の可能性が高い。」

「待って。それじゃあ、おかしくない？私の本の色^{カラー}制約は赤系統だ
って話じゃなかったの？なら、その本の色^{カラー}は赤系統じゃないの？」

美穂奈の質問に、リングは首を振る。

「いや、違う。級制約^{ランクせいやく}は、魔法道具と同じ級^{ランク}の魔力を必要とするが、
色制約^{カラーせいやく}は同じとは限らない。そもそも、色制約^{カラーせいやく}が2種以上あるのが
普通なんだから、同じ色^{カラー}でなくてはいけないうのが既に矛盾だろ
う。」

言われて、たしかにそうだと美穂奈は頷く。

「…ややこしいわ。」

「まあ、全部わかれとは言わねーよ。とりあえず、やってみて、この本の色が黄色だった場合、俺が中身を確認出来るし、違った場合この本の色が判明する。…何も起きなければ、ただの本だ。」

言って、リングは先程ラズの本にしたのと同じく、口の中で何やら小さく呟いた。

瞬間、目の前にあるラズの背中に緊張が走ったのがわかった。

素早く先程のリングと同じ様に、空中に何かを描くと、ラズの周りに緑色の光の粒子が舞い上がった。

そして、最後にラズが何か呟くのと、凄まじい音が耳に届くのは、ほぼ同時だった。

“バリバリバリッイイイッツッ！！”

「ひゃああっ！」

近くで雷が落ちた様な轟音に、美穂奈は目を瞑りラズにしがみついた。

「くっ…！！」

ラズの辛そうな声に驚いて目を開けると、辺り一面赤い光に包まれていた。

「何、これ？」

「ミホナ！触っちゃ駄目だ！！」

そっと手を伸ばして触ろうとした瞬間、ラズに大きな声で制止され、美穂奈は慌てて手を引つ込めた。

それと同時に、赤い光も徐々に弱くなり、消えた。

「な、何が起きたの？」

ドサッ。

「え？ラ、ラズ！！」

呆然とその景色に見入ってた美穂奈を現実に戻したのは、ラズが倒れる音だった。

「ラズ？ラズ、大丈夫？！」

慌ててしゃがみ込み、額や頬を触ると、「うっ。」と小さなうめき

声がラズの口から漏れた。

顔色が悪く、脂汗をかいていて、見るからにやばそうな感じではあるが、どうして良いのかわからず、美穂奈は首を巡らせる。

「何、どうなって…。そうだ……！」

ふと思い出したもう1人の人物を探し美穂奈が振り返った先には、赤い本を地面に取り落とし、膝を付いてやはり苦しそうにしているリングの姿だった。

「ちょ、大丈夫?! 何、どうしたの2人共！」

ラズと違い、かろうじて意識のあるリングに美穂奈が問いかけると、リングは苦しそうに一度息を吐き出した。

「マジかよ。」

呟いて、赤い本を睨むリングに美穂奈は更に声を張り上げた。

「ねえってば……！」

「わりい、ちよつと、後にして……。」

ドサッ。

「あ! ちよつと、待ってよ!!! ねえ!!!」

限界と言わんばかりに床に突っ伏してしまったリングに、美穂奈は意味がわからないと部屋の中ぐると見渡し、呟いた。

「…どうしたら良いのよ。」

この世界に来てすぐと良く似た光景にデジャヴを感じながら、美穂奈はどうして良いかわからず、しばらくその惨状に呆然とするのだった。

看病とライフライン

ふっと意識が上昇する感覚に、リングは目を開けた。

地面が近く、倒れていると理解するのに数秒。

体を起こそうとして鉛のように重く動かないと理解するのに更に数秒。

仕方がないので、ゆっくりと首だけ巡らせると、額から何かがずり落ちた。

「あ、気が付いた？」

声のする方を見れば、茶色のふわふわした髪を肩口まで伸ばした少女がこちらを心配そうに見下ろしていた。

「……………あー。えっと。」

何が起きたのかわからず、とりあえず声を発して見ると、なんだか物凄く喉が渴いており、声もカラカラだった。

「…大丈夫？ 起きあがれるなら、ベットに移動して欲しいんだけど。」

「…そう言いながら、リングの額からずり落ちてしまったものを拾い上げ、少女はリングに手を差し伸べた。

「女の手を借りるなんてまっぴらゴメンだと言いたいところだが、今の状態じゃ到底1人で起きあがれる気がせず、リングは黙ってその手にすがった。

「…その状態じゃ、ラズを運んでもらうのは無理そうね。」

「そう言われ、視線を巡らせれば、お人好しの友人が地面に倒れているのが見えた。

額には濡れたタオルが置かれ、体には毛布が被せてあり、自分もきつと同じ状態だったのだらうとリングは鈍くなった頭で思う。

「かろうじてベットに辿り着き、半ば倒れるように横になれば、そっと体に布団をかけられる。

「水…は、飲めなさそうね。とりあえず、今はもう一眠りした方が

良いわ。おやすみなさい。」

額に置かれたタオルが冷たくて気持ちが良い。

リングは言われるままに目を閉じ、もう一度眠りについたのであった。



ゆっくりと目を開ければ、ぼやけた視界の中に、少女の後姿が見えた。

「ミホナ？」

カラカラの声で呼ぶと、振り返った美穂奈の黒くて大きな瞳が自分をとらえた。

「ラズ！大丈夫？」

心配そうに駆け寄ってくる姿に、ラズはほっと息を吐いた。

「ん。怪我とかない？」

「私は大丈夫。それより、ラズは？何がどうなったの？」

見れば、ベットに横になっている口の悪い友人の姿。

きっと、意味も分からず自分達が倒れてしまつて心細い思いをしたのかと思うと、申し訳ない気分になった。

「ああ、今はそれはどうでも良いわ。とりあえず、起きれる？ベットは今いっぱいなんだけど、ソファアに移動しましょ？床よりはマシなはずだし。」

そう言つて、差し伸べてられた小さな手をラズはつかんだ。

「…………ラズ、大変なのはわかるんだけど、ちょっとだけ力入らない？さすがに、私の力じゃ支えるのが限界で、引っ張りあげるのは無理だから。」

言われて、全く力の入らない体を叱咤してなんとか体を起こした。

「こっち、ゆっくりね。」

重いだろうに、一生懸命ヨタヨタと歩きながら支えてくれる美穂奈にラズは心の中で感謝した。

やっとの思いで辿り着き、ラズは倒れるようにソファに体を沈めた。

「ラズ。水、飲める？」

美穂奈の言葉に、ラズは小さく頷いた。

一口飲んだだけで、生き返るような、そんな感覚がした。

「じゃあ、ラズももう一眠りして。おやすみなさい。」

体に毛布の、額に濡れたタオルの感触を感じながら、ラズはそのまま再び眠りについた。



「さて、と。」

ラズに毛布をかけ、美穂奈は小屋の中を見渡した。

とりあえず、我に返った美穂奈はラズとリングの様子を改めて観察してみた。

医学の心得はないが、とりあえず外傷はなさそうだし、見た目から過労じゃないかと思った美穂奈はしばらく2人を寝かせておくことにした。

ラズには悪いが、小屋の中を漁らせてもらい、毛布と濡れたタオルでとりあえず応急処置。

本当はベットに運びたいが、いくらなんでも気絶した男の人を運ぶ程の力はなかったので、心苦しいが床に放り出したままだった。

けれど、先程一時的に目を覚ましてくれ、それぞれベットとソファ

ーに移動してくれたので、少しホッとした。

リングは水を飲む前にダウンしてしまったので、枕元に水差しを置き、美穂奈は改めて小屋の中を見渡した。

2人が過労で倒れたのだとしたら、しばらく休ませて、食事をとればそれなりに元気になるだろうと思っているのだが。

美穂奈は小屋の一角を見て、少しだけ眉尻を下げた。

「…料理はそれなりに出来るんだけど、いかんせん竈かまどを使った事がないのよね。」

そう、先程は「生活スペースなんだ、へー」程度で見ていたが、よくよく見ればこの小屋の中は美穂奈にとって違和感の固まりだった。まず、台所が竈かまどで、水は水道でなく、外の井戸からだったし、トイレとお風呂が見当たらない。

「電子機器が1つもないし。」

食材の入った箱は、冷蔵庫でなく文字通りただの箱だった。

ただ、魔法かなんなのか、コンセントも差していないのに、箱の中はひんやりとしており、食材が傷む心配はなさそうだった。

「もしかして、魔法があるから、科学がほとんど進歩していない？可能性としてはありそうだが、ただこの小屋は都心部から少し離れた森の中にあるとの事なので、この小屋の中だけ時代に取り残されているという可能性も捨てきれない。」

「…どっちにしても、困ったわ。」

食事は作れず。

医者と呼んでくる訳にもいかず。

後はラズとリングが目覚めるのを待つしか出来ない。

美穂奈は椅子に腰掛け、息を吐く。

ふと、視界のすみに赤い本をとらえ、美穂奈は知らず難しい顔をする。

あの時、何が起きたのか、美穂奈にはサッパリわからなかった。

リングがラズの本にしたように、自分の魔力を注ぎ、攻撃された場合リングの魔法で相殺するはずだった。

危ないからとラズが美穂奈を背にかбайながら、リングがそれを実行し、本がただの本なのか、ラズの本と対なのか、ついでに本の色カラーを調べようと、そういう話だったのに。

リングが魔力を注ぎ込んだ瞬間、ラズの背中に、たしかに緊張が走った。

指で宙に何か描いていたのを見ると、ラズは魔法を使った？

ラズの本に魔力を注ぎ込んだ時とは比べものにならない程の大きな鋭い音。

目を開けたら、真っ赤な光が小屋全体を包んでいた。

あれがあの本の攻撃だったのだろうか？

でも、だとするとこの小屋の中に被害が全くないのが不思議だった。小屋の中は、どこかが木っ端微塵に吹き飛んでいたり、家具などがぐちゃぐちゃになったりなどの荒れた様子は全くなかった。

ただ、ラズとリングだけが、倒れてしまったのだ。

人体にだけ影響があるのなら、美穂奈がこうしてピンピンしている事の説明もつかない。

「…直前にラズが魔法を使って守ってくれた？」

赤い光は、ラズと美穂奈を避ける様に小屋の中を包んでいた。

美穂奈が光に触れ様と手を伸ばした時に、ラズは駄目だと美穂奈を叱っていた。

「…なら私が無事なのはわかるけど、同じ条件のはずのラズが倒れるのはおかしいわよね？」

やはり、わからない。

この世界で生きていくなら、魔法をもっと深く勉強する必要があると、美穂奈は改めて思った。

「さてと。」

美穂奈は椅子から立ち上がり、背伸びする。

本当は食事を取ってもらいたかったんだけど、美穂奈が作れないとしたら諦めるしかないだろう。

途中で目を覚ました時用にラズの枕元にも水を置いてと。

2人の様子を見る限り、多分今日はもう説明を求めるのは無理だろう。

明日の朝、2人の様子を見てから考えよう。

美穂奈は、小屋を漁った時に見つけた予備の毛布を引っ張り出す。正確な時間はわからないが、外は日が落ち暗くなってきている。

美穂奈も今日一日色々な事があり過ぎて疲れてしまったので、少し早いかもしれないが眠る事にしたのだ。

ただ、どこで寝るかだ。

ベットにはリングがいるし、ソファーにはラズ。

他に、ベットのかわりになりそうな家具はない。

まあ、それ自体は別に良い。

来た時同様、体が痛くなるかもしれないが床で寝ても良いのだし。だが問題は、寝ている間に国からの使者が来ないとも限らない事だ。もし、最悪な状況に出くわした場合、ラズとリングはこの状態だし、きっと美穂奈一人では誤魔化せない。

万が一、どちらかの意識が戻ったとしても、ラズは起き抜けすぐに言い訳がスラスラ出てこないだろうし、リングはきっと美穂奈の味方をしてくれないだろう。

だとすると、安全策を取るしかなかった。

幸い、先程水を汲みに外に出たが外は寒くもなければ暑くもない、ちょうどいい気温だった。

リングも、今は冬ではないとから凍死の心配もないと言っていたのだ。

夜になって急に氷点下になって冷え込む心配もなさそうだ。

「ラズ、怒るかしら？」

呟いて、美穂奈は森の中で野宿する為に、小屋を出て行ったのだった。

疲労の原因と看病の恩

「おい、ラズ！」

ゆさゆさと揺さぶられ、ラズは重たい瞼を一生懸命持ち上げた。

「…リング？」

そこには、見慣れた友の姿があった。

「おい、ラズ。あの女、知らねーか？」

「あの女？」

リングの口から女の子の話が出るなんて珍しい。

そう思いながら体を起したラズは、昨日の事を思い出しハツとして一気に目を覚ました。

「ミホナ、いないの?!」

決して広くない小屋の中を見渡すが、美穂奈の姿は見えない。

「俺もさっき起きたばっかなんだよ。」

リングもぐるっと小屋の中を見渡し、溜息を吐いた。

「つか、いつの間にか朝だしな。マジ久しぶりに死んだ様に寝た。」

「そんな事言ってる場合じゃないだろう! ミホナはどこに行ったの?」

「俺が知る訳ないだろう。」

全く役に立たない友人にラズは痺れを切らした様に、小屋の外に美穂奈を探しに行こうと立ち上がる。

「どこ行く気だよ、ラズ。」

「ミホナを探すんだよ、決まってるだろ。」

「ほっとけて。やっぱり異世界とかただの虚言で、俺等が寝てる間に逃げたのかも知れねーだろ。」

まだそんな事を言ってるのかとラズはリングを睨んだ。

「あの本。リングだって、ミホナの言う事全部が全部嘘じゃないってわかっただろう。」

あの赤い本の秘密。

それは、あの本に魔力を注いだリングが一番理解しているはずだ。
「わーってるっつの。だったら尚更、あの女が言ってる事が本当なら、最終的に頼れるのは俺等だけだろ。あの女は頭が悪い訳じゃなかったし、ちゃんとその辺りは理解してるだろ。無謀にも1人で街に行つて、異世界から来たとか吹聴する様な感じじゃなかったし、すぐに戻ってくるだろ。」

リングの言葉に、ラズはストーンとソファーに座りなおした。
たしかに、美穂奈はどちらかと言うと頭の良い女の子だった。

リングが言った様な無茶はしないだろう。

もしかしたら、その辺を散歩してるだけかもしれないし。

「そう、だね。少し待ってみようか。」

そこで、ラズは枕元に置かれた水を見つけ、少しだけ頬を緩めた。
きつと、美穂奈が置いてくれたのだろう。

ラズはその水に手を伸ばし、口を付ける。

重くて仕方がない体が、少しだけ軽くなった気がした。

「…こんな風に、魔力がからっぽになるまで使い切ったのは初めてだな。」

ポツリと呟く様に言われたリングの言葉に、ラズは顔を上げ苦笑した。

「僕もだよ。緑の本を読む時だって、ちゃんとある程度の余力を残して終わってるし。こんな風からっぽになるのは初めてだよ。魔力を使い切ると、疲労感で倒れるんだって始めて知ったよ。」

「だね。つか、倒れるぐらいで済んで良かったよな。下手したら、死んだ。」

リングの言葉に、ラズも硬い表情で頷いた。

「だね。僕も、緑の本を読み終わった後で魔力がほとんど残ってなかったら、本当に危なかった。咄嗟に防御魔法を発動させて良かった。」

防御魔法はラズが一番得意な魔法だった。

それ故に、ギリギリ持ち堪えられたのだと思う。

「俺は、一番得意な攻撃魔法使って相殺したんだけどな…。驚くべき事に、完全に相殺しきれなかったんだよな。大分押されてた。」
ラズが赤い本を見る。

リングの言葉が本当なら、やはりあの本は…。

「信じらんねーけど、あの赤い本はSS級だ。」

リングは、優秀な魔法使いだ。

この世界でも一握りの人間しか使えないとされているS級の魔法をいくつも使える。

特に、攻撃魔法に関しては天才的だ。

S級の中でも、凄く上質な魔法を使う。

なのに、そのリングの攻撃魔法をもってしても相殺出来ないとなると、答えは1つしかない。

あの赤い本が放った攻撃魔法の級がSS級なのだ。

それはすなわち、あの赤い本の級自体が、S級だという事。

「エルドの作った本じゃないな。たしかにエルドは若い頃SS級を使えたが、緑の本と比べると大分魔法の性質が違う。」

「それは僕も思った。曾祖父の魔法と比べて、もっと強力で凶暴な感じがした。それに、あの赤い光…。」

ラズの言葉に、リングは頷いた。

「ああ、あれは原色の色だ。」

美穂奈には、作った人間の色が絶対に魔法道具に定着する訳ではないと説明したが、原色は別だ。

原色の色、赤、青、緑、黄の4色は絶対に魔法道具に定着する事はない。

そう、原色持ち以外の人間が作った物以外には絶対に。

「ただの赤系統の色を持つ魔法道具ならまだしも、赤の原色の色を持つ魔法道具とか、有り得ないだろ。」

「赤の原色持ちが作った魔法道具。それが、何故異世界の人間であるミホナに引き寄せられたのか。ますます謎が深まったね。」

「ったく、また面倒な女拾いやがって。」

その言葉には、ラズは苦笑するしかなかった。

何故なら、自分でも結構面倒だと思っているから。

でも、だからと言って、放り出す気はないけども。

リングも、今はきつと美穂奈に興味を持っているだろう。

何故なら、彼も自分と一緒に、魔法馬鹿だから。

女の子っていうのもあるけれど、それよりも何よりも、あんなに現代魔法の不思議や秘密の塊を、手放すのは惜しいから。

「…それにしても、あの女遅いな。」

「そう言えば…。本当にどこ行っただろう？」

この小屋の周りはずただの森だ。

何か目新しいものがある訳でも、楽しい場所もない。

「そろそろ探しに行った方が良かな。」

そう言って立ち上がった瞬間、出入り口の扉が開かれた。

そこには、毛布を頭からすっぽりと被った美穂奈が立っていた。

「ミホナ。どこ行ってたの？」

少しホッとしながらラズが呼べば、美穂奈は何だか赤い顔でモジモジとこっちを見る。

どうしたのだろうとラズが首を傾げれば、美穂奈は蚊の鳴くような小さな声で呟いた。

「お、おトイレって、どこかしら…。」



最悪だわ。

ラズに教えてもらい、小屋の外にあるトイレを教えてもらった美穂奈はその後2人に昨日の事について説明をされたが、あまり頭に入

ってほこなかった。

朝起きて、最初に聞く事がトイレとか…。

大丈夫？とか、何か食べる？とかもつと気の利いた言葉があっただろうに。

よりにもよって、トイレ。

生理現象なのだから仕方がないが、恥ずかしい。

1人反省会をしていると、ラズの心配そうな顔が美穂奈の顔を覗き込んで来た。

「…ミホナ、聞いている？」

その声に、ハッと顔を上げた美穂奈はコクコクと頷いた。

「え、ええ。あの赤い本がSS級の魔法道具ランクマジックアイテムだったのよね。で、ラズもリングもあの本からの攻撃を防ぐ為に魔力を使い果たしてしまい、倒れた。」

「そうだ。魔力ってのは、生命エネルギーみたいなものだからな。それが空になると、俺等は身動きが取れなくなるんだ。」

電池切れのオモチャの様なものかと思うと、なんとなくリングも少しだけ可愛く思えた。

「でも。そうすると、ラズの曾おじい様の本とは何の関係もないのよね。だったら何であんなに似ているのかしら。偶然？それにしては出来過ぎじゃない？」

美穂奈の持つ本とラズが持つ本は本当に良く似ている。

色が違うだけで、デザインは全く一緒だ。

偶然にしては出来過ぎている。

「それなんだが、考えてみたんだが似ているのは偶然じゃなくて、故意の結果じゃないかって思うんだ。推測だが、エルドはこの赤い本の存在を知っていて、これを模して緑の本を作ったんじゃないかな？」

「何の為に？」

ラズの言葉に、リングは首を振る。

「俺が知る訳ないだろ。それに言ったが推測だ。根拠も何もねーよ。」

ただ、似過ぎてる。だから模造品なんじゃないかって思ったんだ。」
リングの言葉に、美穂奈も頷いた。

「たしかに、可能性としてはない事もないわね。ラズの曾おじい様はとても強い魔法使いだったのでしょう？そういう人は、更に強く強いものを求める傾向にあるわ。しかも、SS級の魔法ラングを使える人間は自分だけ、自分は選ばれた人間だ、特別だと思っていたのなら、こういう強力なものに惹かれてもおかしくない。」

美穂奈の言葉に、ラズは1つ頷く。

「たしかに曾祖父は、少し傲慢なところがあったと聞く。自分の魔法を過信していると。」

「なら、やっぱりエルドがこの赤い本を模して緑の本を作った可能性が高いな。」

リングはそう言って、ラズの本を指差した。

「ラズ、おまえの本は何が書いてあったんだ？」

リングの言葉に、ラズは首を振る。

「特に何って事はないよ。普通の小説。1人の女の子の一生が書かれた普通のね。」

「…それって、魔法でロックをかけなきゃいけないような内容なの？」

エッチイ感じのかと思い、美穂奈がラズをジト目で睨むと、ラズは慌てて首を振った。

「違う、違う！本当に、普通の内容だから！！」

「だとすると、何でこんなご大層な制約がついてるのかって事だよな。何か他の意味が隠されているのか…。ラズ、何か気付かなかったのか？」

ラズは首をゆっくりと振る。

「暗号が隠されてる感じもなかったし、特に不審な点はなかったよ。」

3人は同時に溜息を吐いた。

「結局、何もわからないのね。」

「むしろ、謎は深まったよね。どうする、リング。」

「どうするって言われてもな…。」

リングはチラリと美穂奈を見た。

「とりあえず、こいつをどうにかしないとだろ。この本の謎を解こうと思ったら、それこそスゲー時間がかかる。その間、こいつをどこに置いておくかだろ。」

その言葉に、美穂奈は少し驚いた顔でリングを見た。

「どうしたの？大嫌いな女の心配するなんて。」

「うるせー。一応この本はおまえの物だろ。所有者のおまえから借りるなら、それ相応の対価を支払ってやるって言ってるんだよ。」

「そうなの？でも、有り難いわ。ありがとう。」

迷惑極まりない本のおかげでこの世界での生活を約束されるなら凄く得した気分だ。

「まあ、どこに置いておくかなんて、ほとんど選択肢ないけどな。」

この小屋の中はまず無理だろ。俺は野宿でも構わないが、それだとラズが納得しねーし。」

面倒臭そうに溜息を吐くリングに、別に野宿でも構わないと言おうとして美穂奈はラズに睨まれ、慌てて口を噤んだ。

今下手に口論すれば、昨日の夜野宿した事がラズにばれて怒られそうだ。

今のところ何だか知らないが、変に誤解してくれているのだ。

そのまま誤魔化しておきたい。

難しい顔をしたままのリングを考えを、美穂奈は黙って待った。

「…街の宿の一室を借りるか。とりあえず、しばらくはそれで繋ごうぜ。」

しばらくして、そう提案したリングに美穂奈はそつと手を上げる。

「でも、私お金ないわよ。宿になんて泊まれないわ。」

その質問に、リングは苦々しい表情で美穂奈を睨んだ。

「俺が払うつつつてんだよ。黙っておまえはおとなしく宿にひきこもってろ。」

そんな事、今までの会話で一言も言っていないじゃないかと思いがらも、ありがたい提案である事にかわりはないので、美穂奈は頷いた。

「ありがとう。」

「別に。：看病の礼だよ。女に貸し作ったままとか嫌だからな。これでチャラにしろよ。」

そんなつもりで看病をしたのではないが、何か理由がある方がリングもやりやすいのかもしれないと思い、美穂奈は頷く。

「そうね。それくらい之恩は感じてもらって当然よね。」

「ツチイ！これだから女は！！」

力いっぱい舌打ちするリングに失敗したかな？と首を傾げれば、ラズが笑って頷いてくれたのを見て、美穂奈は自分の考えが間違っ
てなかったのだと確信した。

リングはこういう性格の人なんだと思って付き合っていこう。

「……………ん？ちょっと待って、そう言えば私、自己紹介してないし、されてないわよね？」

そう、国からの使者かと思ってビクついて口論してと、美穂奈とリングの出会いはずいぶんめまぐるしいもので、挨拶らしい挨拶なんてしていない。

「あ？別にいらねーよ。おまえの名前を呼ぶ気ねーし。」

ある意味腹が立つ返答に対してはスルーして、美穂奈はリングに向き直る。

「私の名前は、美穂奈。美穂奈って呼んでくれて良いわ。」

「だから、人の話を聞け！つか、何でそう上からなんだよ、おまえは！」

「だって、あなたに対して下手に出るの、何だか腹が立つじゃない？あなたがそういう態度なんだから、私だってそれ相応の態度で
返すするわ。」

ヒクヒクと怒りに引きつった顔のリングと、何だか笑いを堪えているラズの顔を交互に見比べ、美穂奈はとびきりの笑顔を返すのだっ

た。

「これからお世話になります。」

美穂奈の人生は、16歳の誕生日を境に、クソつまらない婚約者様との結婚という地獄の様な人生から、異世界で見知らぬお人好しに拾われ1からやり直すという人生に路線変更した。

あの赤い本は何なのか、自分の色^{カラー}って何なのか、色々な不安はあるけれども、きっと自分で切り開いていける分、前よりももっとずっと楽しくて幸せな人生であるはずだと、美穂奈は確信しているのだった。

髪の色と瞳の色

「ねえ、リング。」

ザカザカと美穂奈の歩調なんてお構いなしに早足で歩くリングの背中を一生懸命追いかけてながら、美穂奈は声をかける。

「リングってば！ねえ、聞いてる？リーナーグー！！」

けれど、やはり振り返る事もなく、返事をするでもなく、おまけに美穂奈から逃げるかの様に更に早くなった歩調に、美穂奈は大きな溜息を吐き、その背中を睨んだ。

「リンリン！」

その呼びかけに、ようやく立ち止まり振り向いたリングの表情は、やはり怒ったものだった。

「その馬鹿っぽい名前で呼ぶなって言ってるんだろ！！」

「なによ、リンリンって呼ばないと振り向かないじゃない。」

「くっく！ラズの野郎、覚えてろよ！！」

そのぼやきを聞きながら、美穂奈はほんの数十分前の事を思い出す。結局、あの後リングは自分で自己紹介をしなかった。

見かねたラズが仲介役としてリングを紹介してくれたのだが…。

「えっと、彼は僕の友達で、リングⅡリンドベルイ。僕と同じ歳で、さっき言ってた黄色の原色持ちだよ。」

その言葉に、美穂奈はリングの傲慢な態度に納得し頷いた。

原色持ちとは皆こんな感じなのだろうか。

「リングって呼べば良いから。ね、リング？」

「呼ぶな。」

ラズがせっかく間に入り、仲を取り持とうとしているのにいつまでも駄々っ子みたいに文句を言うからか、はたまた魔力を使い果たして疲れてて機嫌が悪かったのか、ラズはリングのその言葉にニッコリと笑いながら、美穂奈に魔法の呪文を教えてくれた。

「リングが返事しなかったら、『リンリン』って呼んであげると良

いよ。絶対振り向くから。」

ラズに教えてもらった魔法の呪文は効果絶大だった。

リングは、『リンリン』と呼ぶ度に、額に青筋浮かべながら律儀に振り向き怒った。

『リンリン』と呼ばれようとも徹底して無視を決め込めば良いのに……。

よっぽぼこの名前で呼ばれるのが嫌いな様だ。

「つか、口より足を動かせ。黙ってついて来い！」

「あのね、黙ってついて来いって言うけど、速過ぎ。ここ一応足場のあまりよろしくない森の中なのよ？もう少し私を気遣ってくれても良いんじゃない？」

しかも美穂奈は自分の靴がなく、ラズに借りたぶつかぶかのサンダルの様なものを履いているのだ。

転ばない様にするのも一苦労だというのに、あまりにも酷くないかと抗議してみる。

「ああ、悪かったな。俺とおまえとじゃコンパスの長さが違うもんな！」

「コンパスの長さというより、身長の違いよ！！」

たしかに、リングと比べれば美穂奈の足は短いかもしれないが、何だか短足と言われるのは無性に腹が立つので訂正してみる。

「とりあえず、歩調は少しだけ緩めてやるから口は閉じろ。うるさい。」

そう言って再開したリングの歩調は、先程とあまりかわらず、やはり速かった。

美穂奈は少しだけ頬を膨らませ、小走りにリングの隣を歩く、いや走る。

「ねえ、リング。どうしてラズはこんな不便なところに住んでるの？」

「本当におまえは俺の話聞かねーな。黙れっつの。」

「街から徒歩1時間とか、不便にもほどがあるわよ。オーラーって

住宅街はないの？」

美穂奈の主張は無視されるのだ。

だったらこちらも、その主張は無視するとばかりに、美穂奈はリングに喋りかけ続けた。

「それとね、さっき聞きたかったんだけど。この世界って、科学が発展してないの？私の世界では水は蛇口を捻れば出てくるし、火はボタン1つで良いし。というか、お風呂ってあるの？私、昨日の夜入ってないから気持ち悪くって……。」

「ええい！うるさい！！女は喋ってないと生きていけないのか？！結局先に堪えられなくなったのはリング。」

その怒鳴り声に、美穂奈はビククリするでも怯えるでもなく、ケロリと答える。

「別に、喋ってないと死ぬわけじゃないけど、気になるでしょ？これから、この世界で暮らしていくんだから。」

「つか、異世界から来たわりに、おまえは早々に馴染み過ぎなんだよ！」

「良いでしょ？泣きわめいたりしなくて。」

ニッコリと笑って言ってあげれば、リングは地面に届きそうな程の深く重たい息を吐いた。

「……………まあ、そうだけど。」

その呟きの後の、リングの歩調は大分緩やかなものとなり、美穂奈は満足気に笑った。

「ねえ、リング。街に着くまでにまだ少しあるでしょ？色々聞いても良いかしら？」

「拒否しても一方的に喋り続けるんだろ。だったら、いちいち俺に聞くな。まあ、答える価値のあるものなら、一応答えてやる。」

それはつまり、俺をやる気にさせてみるという事なのか。

美穂奈は歩きながら考えていた質問をいくつか口にしてみる。

「1つ、この世界の人達の外見について。2つ、この世界の生活スタイルや文化について。3つ、ラズが何故離れ小島で暮らしている

のか。」

美穂奈の問いにリングは視線だけをこちらへ寄越し、答える。

「1と2は答えてやる。3つ目はラズに直接聞け。」

元々、ラズの件はただ美穂奈が気になっただけで、重要な質問事項ではなかったたので、素直に頷いた。

「うん、わかったそうする。じゃあ1つ目ね。」

言って美穂奈は自分を見下ろす。

「私って、この世界の人から見て、変って事はない？」

「言ってる意味がわからねー。」

「んとね、私のいた世界：正確には国ね。日本って言うんだけど、その国の人間の標準スタイルが、黒髪・黒目・肌は黄色っぽい色をしているの。」

「………黒？」

言って、リングは訝しむ目で美穂奈を見た。

「…うん、私の髪は茶色っぽいけどね。色素が薄いから。」

美穂奈の髪は、生まれつき色素が薄く、茶色く見える。

良く頭髮検査などで引っかかったなとは今は遠い思い出である。

「まあ、とにかく、黒とか茶とか、地味で暗い色ばかりなのよ。でも、ラズもリングもカラフルでしょ？この世界では、それが普通なのかって？」

日本人ばかりのところに金髪碧眼の白人を放り込んだら、誰だってその人は外人だとわかるだろう。

それと一緒に、私はこの世界の人から見て、おかしいと、違う国の人？と思われるような容姿をしていないかが気になったのだ。

「ああ、なるほどな。別に髪の色は関係ねーよ。髪の色は千差万別だから、茶系も黒もいる。つか、基本的に色と同じ色になる事が多い。俺の色は黄色だから黄色に、ラズの色は灰緑っぽい色だから、灰緑に。」

言われて見れば、リングの髪の毛は綺麗な黄色だ。

そして、瞳は綺麗な…。

「…ねえ、どうして瞳は青なの？」

そう、リングの瞳は綺麗な青色だ。

自分の色カラーの色になるならば、リングは黄色になるはずなのに？

「母親が青系統なんだよ。色カラーが遺伝だったのは聞いたよな？髪と瞳の色は基本的に色遺伝カラーいでんと似たようなもんだな。俺の父親は黄系統で俺自身の色カラーは黄色で髪も黄色。で、瞳は母親似の青系統。」

「なるほど。そうよね、髪も瞳も基本的に遺伝性のものだもの。日本人が黒髪茶目なもの、外人が金髪碧眼なもの、遺伝的なもの…。概念としては地球と同じだと、美穂奈は納得した様に1つ頷いた。」

「つまり、ラズは両親共に緑系統だからラズ自身の色カラーも髪も瞳も全部緑系統になるって事ね。」

「そういう事。」

「…という事は、応用すればリングの瞳や髪の色は緑系統になる可能性もあったって事？」

美穂奈は今リングから説明された事と、昨日ラズから説明された事を思い出しながら言う。

「リングのお母様が青系統で、お父様が黄色系統。なら、その2つを足した色、緑系統になる可能性もあったと。」

美穂奈の言葉に、リングは少しだけ笑う。

「やっぱおまえ、頭は悪くないな。」

道が途切れ、段差になったところを飛び越えながらそう言うリングの後に続き、美穂奈も段差を飛び降りる。

褒めてくれても、手を貸してくれたりはしない。

というか、期待した自分が馬鹿だったのか。

けれど、一応追いつくまで待っていてくれる様だ。

美穂奈が追いつくのを確認すると、リングはまた歩き出しながら話を続けた。

「髪は特に自分の色カラーが出る事が多いが、稀に親の色カラーが出る事もある。瞳は、まちまちだな。ラズみたいに自分の色カラーの奴もいれば、俺みたいに親の色カラーが出ることもある。だから、多分お前は親の色カラーが出たん

だろ。」

美穂奈が赤の原色だとすると、どちらかの親は赤系統だったのだろう。

その場合、茶系の色が出るって事は、もう1人の親は茶系か、緑系統？

「まあ、だから気にする事ねーよ。茶色なら他にもいるし、赤い髪の方が大騒ぎになるとこだったしな。」

そうだ、赤系統の髪の人、瞳の人もないんだ。

美穂奈はラズとリングの言葉を思い出す。

この世界で、赤は貴重^{カラー}な色。

そんな色^{カラー}が街中を歩いていたら、たしかに目立って仕方がないだろう。

「基本、会う人間の髪の色見て、そいつの色^{カラー}を断定すれば良い。おまえみたいなケースはマジで稀だからな。」

「なるほど。色^{カラー}って複雑ね。結構説明を聞いてるはずんだけど、未だに底が見えないわ。」

昨日から散々説明されている色^{カラー}。

けれど、次から次へと色^{カラー}への疑問は増えていき、説明は絶えることがない。

「一応、この世界での根底だかたな。一朝一夕で全部わかるわけねーだろ。…っと、2つ目の質問は保留な。」

言われて何でだろうと思った美穂奈は正面を向いて理解した。

視界のひらけた場所に出たのだ。

それはすなわち、もうすぐ街につくという事だ。

「頼むから、黙って着いて来い。」

リングの言葉に、人通りの多いところで「魔法って何？」と言っちゃうほど馬鹿ではないと視線で訴えながら、美穂奈は頷いた。

color^{カラーズ}sの中心都市、オーラーに到着である。

街と宝石

『C o l o r e s』^{カラーズ}の中心都市、オーラー。

さすが中心と呼ばれているべきといふかなんというか、とにかく人・人の数がはんばない。

そして、そのたくさんの人の数同様、様々な色が溢れかえる大通りに、美穂奈は一瞬、歩くのを忘れ周りを見渡した。

綺麗だと、そう思った。

「おい、何ボーっとしてんだ。行くぞ。」

リングにせつつかれ、我に返った美穂奈は慌ててその背を追いかけた。

中世ヨーロッパ風の町並みの向こうに、お城の様な大きな建物が見える。

街行く女の人は皆、これまた中世ヨーロッパ風の丈の長いワンピースの様なコートを着ていた。

美穂奈は自分を見下ろし服装を確認する。

部屋着の少し丈の長いワンピース。

ラズやリングが美穂奈を見た時に、服装が変だと思わなかったのは、この服を着ていたからかもしれない。

美穂奈は前を歩くリングの背中を見て、首を傾げる。

この世界の時代背景は、RPGゲームや小説などで良くある、中世ヨーロッパ風なのだが、男性の服装だけは少し違う。

Tシャツにジーンズ、とは言わないが、素材は違うにしろそんな感じの服装だ。

スツキリしていてシンプル。

無駄なヒラヒラ等はない。

(：男物の服の方が、動きやすそうよね。)

そう思いながら、人ごみをかきわけリングの背中を懸命に追いかける美穂奈は、ふと心配になる。

先程から自分で中世ヨーロッパ風と言っているが、もし文化レベルが中世ヨーロッパと同じだった場合。

お風呂といえば、常時入れるものではないし、宿屋は人が多ければ床で寝かされ、よしんばベットで寝れたとしてもノミ、ダニの宝庫（……魔法があるんだもの、さすがにそれはないわよね！）

美穂奈は自分が持つてる中世ヨーロッパの知識を頭を振って追いやった。

ラズとリングを信じよう。

うんうんと自分を納得させる様に頷いていると、リングが振り返えり止まった。

「ここで良いよな？」

言われて見上げた建物は、リングが選んだにしては、えらく可愛い感じのものだった。

「聞かれても分からないし、リングに任せるわ。」

「：じゃあ、面倒臭いし、ここで良いかも。」

言うが早いか入口をくぐるリングの後を、美穂奈は慌てて追いかけた。

「いらっしやいませ。」

宿屋に入っすぐ、そう声をかけてきたのは、淡い水色の長い髪を後ろで1つに束ねた、落ち着いた雰囲気若い女性だった。

「部屋、空いてるか？」

リングの素っ気ない質問に、女性は一っこり微笑みながら頷いた。

「ええ。お二人かしら？」

「いや、こっちだけ。何泊かは決めてないんだが、しばらく頼む。」
くいと親指で差され、美穂奈はペコリと頭を下げた。

「かしこまりました。すぐにお部屋をご用意致しますので、少々お待ち下さい。」

そう言って、2階にある部屋に向かう女性の後ろ姿を見送りながら、美穂奈はホッと胸を撫で下ろした。

先程追い払ったばかりだが、やはり少し心配だった。

贅沢を言える身ではないが、ノミ、ダニ、カビ等と仲良くはしたくなかったし、宿屋というで一階は酒場みたいになっており、二階が宿泊設備の物が多い。

強面の乱暴な男性が大勢いたらどうしようとも思っていたが、この宿屋の一階は酒場ではなく食堂の様になっていて、テーブルの上には花などが飾られ、とても清潔にされている。

この分だと、部屋の方も大丈夫だろう。

それに、オーナーと思わしきあの女性。

とても優しそうな雰囲気であり、何より同じ女。

何がどうって事はないが、女性というだけで、少し安心したのだ。

：そこまで考えてくれたのだろうか？

こっそりリングを盗み見ながら、美穂奈は自分で自分の考えを否定した。

（ないな、だってリングだし。）

ラズならともかく、リングにそんな細やかな気配りが出来るとは思わない。

出来たとして、女的美穂奈を気遣ってくれるはずがない。

「：なんだよ。」

美穂奈の視線に気付き、煩わしそうにそう言うリングに美穂奈は首を振った。

「別に。」

そうこうしているうちに、部屋の準備が整ったのか、宿屋の女主人が階段から下りてきて、ニッコリと笑いながら、鍵を差し出した。

「では、ごゆっくりどうぞ。」



「うわ！凄い、凄い！！ねえねえ、リング。見てよ、凄い！！」

大興奮でリングを手招きする美穂奈にリングは呆れた表情を見せた。

「いや、普通だし。」

「普通じゃないわよ！うわー、凄い！！」

手を叩きはしゃぐ美穂奈に、リングは興味なさげに溜息を吐いた。

美穂奈大興奮の原因は、少し前に遡る。

部屋に入り、早速部屋の中を物色していた美穂奈は、待望のお風呂場を発見し、喜んだ。

「あ、お風呂！良かった、お風呂があるのね。」

リングが帰った後にゆっくり入ろうと思った美穂奈は、ふと違和感を覚えた。

「あ、れ？蛇口はどこ？スイッチ式？」

キョロキョロと風呂場内を探してみるが、それらしいものは見当たらない。

「おい、風呂は後にしろ。今後の事をサッと説明したら俺は行くから、話を…。」

「ねえ、リング。お湯はどこから出るの？」

話をぶった切られた事にイラッとしたのか、リングの眉が若干つり上がる。

「おまえは、本当に俺の話を聞かねーなあ？」

「聞いてるわよ。今後の事をサッと説明したら、リングは帰るんじゃない？その前に聞いておかないと駄目じゃない？」

リングは大きな溜息を吐き出しながら、脱衣所の近くに置いてある籠の中から、拳大の石を2つ取り出した。

「風呂は宝石を使うに決まってるだろ。」

「宝石？」

言われて出てくるものは、ダイヤモンドやサファイヤ、エメラルドなど。

美穂奈の常識からいって、それらでお湯を沸かせるはずがなかった。「決まってるって言うけど、私は異世界の人間なんだってば。」

「…おまえの世界じゃ風呂がなかったのか？」

「あったわよ。でも、お風呂のお湯をはるのに、宝石なんて使わないの。」

美穂奈の言葉に、また説明かとリングが頭をかく。

「とりあえず、今日は簡単にな。説明のし過ぎで俺も若干疲れてきたし。」

「そうね、私もそろそろ頭から煙が出そうよ。」

リングの言葉に、美穂奈は了承の意を込め、そう頷いた。

「宝石ってのは、この世界で生活していく上で欠かせないものだ。生活の補助的役割を担ってる。簡単に言うと、中に魔法を閉じこめた玉だ。」

言って、リングは赤い宝石と青い宝石を美穂奈の方へ投げつけた。

「え、ちょ、まっ！！」

慌ててキャッチした宝石は、赤い方が温かく、青い方が冷たく感じた。

「魔法を閉じこめるって言ったが、俺等が使う魔法を閉じこめてる訳じゃない。宝石に閉じこめられてるのは、自然魔法だ。」

「…自然魔法？」

魔法に自然も不自然もあるのだろうか？

「今、おまえが持つてる赤い宝石は火。青い宝石は水の自然魔法が入ってる。赤い方は温かく、青い方は冷たいだろ。他にも、緑の宝石には風、橙には土、黄色には光、紫には闇が入ってる。」

（あ、魔法っぽい。）

その説明に、美穂奈はポツリと心の中で呟いた。

美穂奈の知っている魔法の知識は、ゲームや小説の世界だが、大抵

その手のものを見たときにくつついてるのが属性。

赤系統や青系統などの色でなく、火属性や水属性といった四大元素＋αである。

自然界にある元素を使った魔法なので、自然魔法と言うのかもしれない。

「俺等が使う色魔法は、割と消耗が激しい。個体差があるし、魔力の少ない人間が一日家事をするのに魔法を使えば、疲労困憊だ。だから、日常生活ぐらいは、この宝石を使って補う。赤い宝石を使えば、竈に火をおこせるし、青い方を使えば洗い物が出来るだろ。」
美穂奈は手の中にある赤と青の宝石へと視線を落とす。

「つまり、応用すれば、お湯を沸かせる事が出来ると。」

「そういう事だ。青い宝石を軽く湯船の底に叩きつけてみる。」
言われた通りに、美穂奈は青い宝石を手にも、湯船の底に叩きつける様に落とした。

瞬間、宝石が割れ、中から大量の水が溢れ出してきた。

「うわ！凄いや、凄いや！！ねえねえ、リング。見てよ、凄いや！！」

大興奮でリングを手招きする美穂奈にリングは呆れた表情を見せた。

「いや、普通だし。」

「普通じゃないわよ！うわー、凄いや！！」

手を叩きはしゃぐ美穂奈に、リングは興味なさげに溜息を吐いた。

「次、赤い宝石にヒビ入れて、水の中に突っ込む。」

もう片方の手の中に残った宝石を、卵を割る時の要領で壁にコンコンとぶつけ、美穂奈は湯船の中に放り込む。

赤い宝石は、ゆっくりと沈み、底にコンと当たった瞬間、水からふわっと湯気が立ち上った。

「うわ！凄いや、凄いや！！あったかい！！」

湯船に手を入れ確認すれば、確にお湯で、美穂奈は感動した。

あんな小さな宝石の中から大量の水が出てくる事、その大量の水を一瞬にしてお湯にする事。

なにより、それをしたのが自分だという事。

例え、玉を割るだけの簡単作業だったとしても、『魔法を使えた』という事実には、美穂奈は感動していた。

キラキラした瞳で水面を見つめる美穂奈を、リングは冷めた視線で見下ろした。

「くれぐれも、赤い宝石を先に放り込むなよ。風呂場が炎上するから。」

はしゃぎ過ぎている美穂奈にそう釘をさすようにそう言ったリングの言葉に、美穂奈は「うっ。」と言葉を詰まらせ頷くのだった。

「き、気を付けます。」

：やはり、どんなに簡単でも知識もなく使うには、魔法は危険なもの様だ。

しばらくは、簡単といえど宝石を1人で使うのは控えようと決め、美穂奈とリングは一旦部屋へと戻るのだった。

空腹と怒り

パチツと目を開け、美穂奈はベットから起き上がる。今日もぐっすり快眠、パッチリ起床。

やはりベットは良いなど、数日前の野宿を思い出しながら美穂奈は洗面所へと向かった。

籠に入っている青い宝石を取り出し、何度も何度も青である事を確認しながら、桶に宝石を落とすとあつという間に水が溜まった。

それで顔を洗い、服を着替え、髪を梳かした美穂奈は元氣良く部屋を飛び出した。

「ソフィアさん、おはよう！」

1階へと続く階段をおりながらそう言えば、ちょうど食堂のテーブルに新しい花を飾る、この宿の女主人と目が合った。

「ミホナちゃん、おはよう。あ、洋服ピツタリね。」

最後の段差をおりたところで言われた言葉に、美穂奈は少し照れながら頷いた。

「はい、ありがとうございます。ただの客の分際で、服までいただきちゃって…。」

「良いのよ。私はもう着ないし、気にしないで。ご飯、作るわね。」

「あ、じゃあ手伝います！」

宿に泊まりはじめて早7日。

美穂奈はこの宿の女主人ととても仲良くなった。

彼女の名は、ソフィアⅡコバート（25）。

亡くなったご両親にかわり、1人でこの宿を切り盛りしているらしい。

宿に泊まりに来た初日、今後の事を話して帰ると言ったりリングは、

「まあ、どうするかはまだ何も決めてねーし、しばらくココで適当にしとけ。」とだけ残し、行ってしまった。

美穂奈自身、具体的な解決方法は期待していなかったしそれで別に

良いのだが、あまりにも適當過ぎる。

しかもその次の日、リングは宿に来てくれなかった。毎日来るとはたしかに言っていないが、それでも様子見ぐらい来てくれるものだと思っていたからだ。

リングのもとで宝石使用の実践はしたが、まだ1人で使うには不安だからとお風呂も入らず待っていたというのに。

食事とか、着替えとか、困ってる事はたくさんあるというのに、その辺りの気遣いは一切なし。

あり得ない。

そう思いながら美穂奈はベッドに倒れた。

ギュルルルッ…。

お腹の虫が悲鳴をあげる。

「…水、じゃ誤魔化せないわよね。水、カロリー0だし。お腹のたしにもなりやしないわよね。」

青い宝石を思い浮かべるが、そもそも下手に宝石を使うのも危険なのだ。

でも、このまま餓死するくらいなら、いつそ宝石を使って何か食べ物とか召喚出来ないかと考えていると、コンコンと部屋の扉がノックされた。

窓の外は真っ暗で、既に夜中の時間帯だろう。

もしかして、今頃リングが来たのだろうかと美穂奈はゆっくりとした動作でベッドから起き上がり、扉を開くと、そこにはこの宿の女主人であるソフィアさんが立っていた。

「あ、ごめんなさい。こんな夜中に。寝ていたかしら？」

「いえ。大丈夫です…。あの、何か？」

少しびっくりしながらもそう答えれば、ソフィアさんは美穂奈を見て少し困った様に微笑んだ。

「いえ。昨日の夜から何も食べていないんじゃないかしらと思って。食堂で準備して待ってたんですが、来られなかったの。」

「……………へ？」

ソフィアの言葉に、美穂奈は間拔けな声を出す。

「あら、お聞きになってませんか？お連れの方にお伝えしたんですが…。朝・昼・夜、食堂にてお食事をご用意しておりますので、食べにいらして下さいと。」

「……………」

この怒りを、どう昇華すれば良いのか。

だが、怒りはあれども水に濡れた某アンパン並みに力が出ない。だから、その前に。

「あの、こんな夜遅くに本当に申し訳ないんですが、今から食べても良いですか？」

そう、まずは食事だ。

お腹が満たされない事には、怒るに怒れないし。

「ええ。すぐにご用意致しますね。」

とても親切なこの女性に感謝しつつ、美穂奈は次にリングに会った時、どうしてやろうかと考えながら、階下にある食堂に向かった。

そこで、ソフィアと自己紹介を交わし、リングに我が身を預けておくところしくないと痛感した美穂奈は、駄目元でソフィアにお願いをしてみた。

自分が異世界の人間だとは打ち明けず、ちょっと常識知らずなところがあり分らない事が多いので聞いて良いですか？と。

宿の客だというだけで、見知らぬ人物にそう言われるのなんて迷惑だろうに、ソフィアは嫌な顔一つせず、頷いてくれた。

最初は客と従業員の距離があったが、徐々にその距離は縮まり、3日経つ頃には既に仲良し姉妹と思われる程仲良くなった。

「ミホナちゃんが手伝ってくれるから、とても助かるわ。」

「いえいえ。ソフィアさんにはとてもお世話になってますから。」
ラズも良い人だったけど、やはり同じ女だからか、ソフィアいるととても落ち着くような、そんな気がした。

ソフィアが作った料理を皿に盛り、いざ食べようとお箸を手にする。
「それにしても、ミホナちゃんのお連れ様、あれ以来顔を出さない

わね？」

ボキッ

と、手の中のお箸が真っ二つに折れた。

先程までの穏やかな気持ちは、『リング』と言う3文字によって完全に吹っ飛んだ。

そう、リングはあれから一週間、一度も来ていない。

放置である。

もしかして、このまま美穂奈をここに置き去りにして迎えに来ないのではないかと思うほど。

「きっと、お忙しいのよ。だってあの方、リンドベルイ家の方でしょ？」

美穂奈を気遣ってか、どこか宥める様にそう言うソフィアの言葉に、美穂奈はビクリした顔でソフィアを見た。

「ソフィアさん、リングの事知ってるんですか？」

「知ってるもなにも…。リンドベルイ家は大変な名家ですもの。この辺りに住んでる人なら、誰でも知ってると思うわよ。特に、嫡男であるリング様は目立つし。」

「…あの口の悪いのが、名家の嫡男。」

あり得ない、と美穂奈は口の中で小さく呟く。

美穂奈の知ってる名家の出と言えば、無駄に紳士的で上品な喋り方をする人ばかりだった。

例え、心の中でなんと思っていようとも、表面上はみんなそんな感じである。

特に、女性を相手にする時は、不必要な程。

「リンドベルイ家はリングの代で終わらせるおつもりなんですかね？」

「ミ、ミホナちゃん！」

いや、でも本当にそう思う。

たしかに、見目は良いと思うけど。

「リング様はとても優秀なお方よ？原色持ちですし、とてもおモテ

になるわ。だから、そんな可愛くない事、言っちゃ駄目よ。ライバルは多いんですから。」

「…………え？ちよ、ソ・ソフィアさん？」

何、今の会話。

何だかとてもなくあり得ない想像してない？

そんな美穂奈にはお構いなしに、ソフィアはニツコリと笑う。

「でも、大丈夫よ。リング様が直々に宿の手配までするなんて、きつとミホナちゃんの事、大好きなんだと思うわ。だから、ね？」

その何も言わずとも、全部わかってるからみたいな笑顔のソフィアに、美穂奈はお腹の底から否定の言葉を叫ぶのだった。

「あんな奴、こっちから願ひ下げですー！ーっ！！」



「ラズ、そっちあったか？」

「いや、特に目新しい情報はないかな。」

王立図書館の一角、机に山積みになされた本の間から、そんな会話が聞こえてきた。

「チツ。やっぱ、教科書や歴史書に載ってる以上の情報はなかなかないか。」

「でも、もう何百年も昔の話だからね。赤の原色持ちを知っている生き証人もいないし、地道に書物をあさるしかないでしょ。」

言いながら、2人の目と手は止まることなく本の上を滑っていく。赤い本の謎を解くには、やはり赤の原色持ちを知る必要があると思っただ2人は、世界一の蔵書量を誇る王立図書館にこもり、毎日毎日

本を読んでいた。

「最後の赤の原色持ちは女。」

「とても強い魔力を持っており、その素質は今まで語り継がれてきた魔法使い達とは比べものにならないほど。そして、若くして死に、その後赤の家系は滅びの一途を辿る。」

「んなの、今時子供でも知ってるっの!」

分厚く難しそうな本に向かい吐き捨て、リングは机の上に突っ伏した。

「同じ内容を言い回しを少し変えただけで何冊も何冊も、意味ねーだろ。」

「それだけ、赤の原色持ちの事は謎って事だろ。」

ラズの言葉に、溜息を吐きながらリングは図書内をぐるりと見渡す。まだまだ読んでない本は山程あるが、たいした成果は得られそうになかった。

今日もうすぐ日が暮れる。

そしたら、警備員がココにやってきて追い出されるだろう。

それまでの間に、もう数冊読み進めるかとリングは体を起こした。

「あ、そういえばリング。」

「なんだ?」

パラパラと本から顔も上げずに生返事するリングに、ラズは凝り固まった肩をほぐしながら聞く。

「ミホナ、元気?」

「は? 知らねー、つかなんで俺が知ってんだよ。」

ラズの質問に、リングは本から顔を上げて眉根を寄せた。

「え、何でって…。毎日様子見に行ってるんだろ?」

「なんで。」

その返事に、ラズは一瞬固まる。

「別に、毎日見に行かなくても良いだろ。死にやしねーよ。」

その一言に、ラズは手にした本を力一杯リングの顔面目がけて投げつけた。

「リングのアホー！」
ラズの放った本は、リングの額に直撃し、綺麗な弧を描いたのだった。

空腹と怒り（後書き）

年末に向けての仕事、忘年会、年賀状作成、大掃除、おせち作り等。年末年始にかけて、更新が滞る可能性があります。

楽しみして下さってる方には大変申し訳ありませんが、ご理解の程宜しくお願い致します。

と言いながら、隙を見て更新出来る様であれば更新していきます（笑）

なので、次回がいつ更新かはわかりませんが、これからもよろしく
お願い致します。

正当防衛

「えっと……。ご、ごめんねミホナ。」

ラズの言葉に、美穂奈は笑顔で首を振った。

「ううん、良いの。悪いのはラズじゃないわ。どうせ全部リングが悪いんでしょ？」

美穂奈が宿に泊まりはじめて一週間後の夜。

ラズとリングがようやく顔を出した。

「全然良いのよ、ソフィアさんが優しくしてくれたし。お風呂入るのもビクビクしたり、食べるものがなくて空腹にみまわれたり、着替えの服がなくて困ったりなんて、初日と2日目だけだったもの。後は快適だったわ、ソフィアさんのおかげで。」

美穂奈の言葉に、ラズは焦ったように視線を彷徨わせ、リングは面倒臭そうに視線を逸らした。

「そ、そうだ！ミホナ、これお詫びの印！！っても、リングのお金で買った物だけ……。」

手渡されたのは、沢山の服や靴など。

「リングが選んだから、きっと似合うと思うよ。リング、センスあるし。」

「えー、そんなの良いのに。全部ソフィアさんがくれたもの。そう、ぜ・ん・ぶ！ソフィアさんが。」

「ご、ごめんね……。」

笑顔だけでも、穏やかな口調だけでも、明らかに刺々しい言葉の数々に、ラズはシュンと項垂れた。

そんな様子を見せられたら、反省してるんだなと許してあげたい気持ちになるのだが、残念ながら美穂奈の怒りのツボを刺激し続ける男がいる限り、ラズにも半ば八つ当たり気味で接する。

そう、現在進行形で美穂奈の怒りのツボをつく人物、リング。

「ああじゃあ、あの女にはチップでもはずんでおけば良いだろ。」

死ねば良いのに、と言っても良いだろうか。

声に出して言っただけ、金さえ出せば文句ないだろうという型にはまっ

た金持ちの男とそっくりで嫌になる。

良いところが全く見つからない。

それでも、と美穂奈は息を吐き出し、心を落ち着かせた。

「…もう良いわ。大体、ラズにもリングにも、私の面倒をみなくちゃいけないって義務はないもの。2人の好意でしょ、これは。あんまりわがまま言えないわ。」

そう、今こうして異世界で1人寂しく森の中で怯えながらでなく、温かい宿のふかふかベットで安心して眠れているのは、ラズとリングのおかげだから。

例えリングが大嫌いなタイプであっても、我慢するしかないのだ。

「あったりまえだっつもの！大体、感謝されても、怒られる筋合いはねーだろ。」

(そう、だからこんな事言われたって笑顔で堪えて……………。)

「風呂の入り方だって一度教えた訳だし、赤と青さえ間違わなきゃ大惨事になんかならねーだろ。風呂に湯はるのぐらい、ガキでも出来るっつもの。赤と青の判別も出来ねーのかよ、おまえは。」

(……………。)

その言葉を、美穂奈は無言でニコニコと聞く。

「食い物が無いとか、普通下が食堂になってんだから、行けば食える事ぐらいわかんたろ。着替えも、別に良いじゃねーかよ、どこか出かける訳でもねーんだから、洗濯してる間、シャツにでもくるまっとけば……。」

「リ、リング、危ない！」

ハラハラしながら、リングの言葉を聞いていたラズが、急にハッと叫んだ声に、リングが反応し、こちらを向いた。

その瞬間を狙っていたかの様に、美穂奈は力いっぱいリングの顔に向かってソレを投げつけた。

「一回、死んで来いっ!!」
ガッシャン!

陶器の割れる音と共に花瓶はリングの額に命中し、粉々に碎け散ったのだった。



魔法とは、本当に便利であると美穂奈は思う。

「大丈夫、リング?」

ラズの言葉に、リングは無言で1つ頷き、額から流れる血を拭った。そこにはもう傷1つない。

先程ラズが魔法で治したのだ。

血を拭い去ると同時に、リングは指先から黄色い光を紡ぎ、宙に何かを描き出す。

それは何度か見た、魔法を発動させる時の動作。

キラキラした光の粒子が、宙に舞い魔法陣の様なものを描き出す。

「ーっ!リング、ストップ!」

途端、慌てた声でラズがリングの魔法陣を灰緑色の光でかき消した。

「なにすんだよ、ラズ!邪魔すんな!!」

「邪魔もしたくなるよ!なにこんなところでS級の攻撃魔法リングを放とうとしてんだよ!!」

「うるせー!その女、マジ許さねー!八つ裂きにしてやる!!」

そのセリフから、どうやら本気で怒ったリングが美穂奈に向かって自分が持てる最大級の魔法で攻撃してこようとしていた様だ。

魔法は綺麗で素敵なものだが、やはり色々な意味でとても危険なものだ。

自分が使うにしても、相手に使われるにしても。

特に、これからリングと一緒にいるならば、いつか本気で攻撃魔法がとんできそうだ。

ラズだって、いついかなる時も守ってくれる訳ではないのだし、やはりここは護身術を覚えなくては。

魔法に対する護身は、やはり魔法だろう。

美穂奈は少し考えてから、暴れてラズに取り押さえられているリングを見た。

「何、リングってもしかして、魔法も使えない女の子にS級の魔法で攻撃しようとかしてたの？うわ、卑怯、最低。」

「あぁん?!」

ギロツと睨んでくるリングと、今は黙っててくれと目配せしてくるラズを無視し、美穂奈はおおげさな溜息を吐いた。

「だってそうでしょ？私、魔法が使えないもの。フェアじゃないわ。無抵抗の人間にいきなり攻撃魔法とか、格好悪っ。」

「だったら、ためーが魔法を覚えろよ!!自分の無能を盾にしてんじゃねーよ!!!」

「り、リング、落ち着いて!!」

全力で暴れるリングと、それをさらに全力でおさえるラズに、美穂奈は思い描いた通りの展開にニッコリ笑った。

「そうよね、私が無能なのが悪いのよね。」

あっさり肯定した美穂奈に、リングもラズも一瞬呆気にとられた様に美穂奈を見た。

その間抜け面に美穂奈はさらに笑顔で笑いかける。

「私が魔法を覚えれば良いんでしょ？言い出しっぺなんだから、責任もって私に魔法を教えてよね、リング。」

瞬間、リングの顔がみるみるうちに真っ赤に染まった。

自分の失言への羞恥と怒りに。

「殺すッ!!!」

「や、めろって!リング!!落ち着けてば!!!あ!!!!!!」

ラズの手を振り解き、魔法そっちのけで本気で殴りかかろうとする
リングの攻撃に、ラズは一瞬顔を青ざめる。
が、

「…正当防衛、よね？」

眩きと共に、美穂奈はリングの攻撃を受け流し、腕を取ってまある
く床に叩きつけるようにして、投げたのだった。

大財閥の一人娘。

そのとても狙われやすい称号を持っている彼女は、護身術として合
気道を習っており、その腕は有段者級だと家庭教師の先生が褒める
程だとか。

性格別魔法系統占いと性格別色分析

「とんだ誤算よね。」

呟いて、美穂奈は本から顔を上げた。

リングを投げ飛ばして数日。

これ以上は下がる事ないだろうと思われた、リングの美穂奈への地を這った好感度は、地面を突き抜け現在更に下降中である。

だが、一度口に出した事を反古ににしてしまうのはプライドが許さないのか、魔法を教えてくれる気はあるようだ。

毎日ラズを介して運ばれてくる魔法書は「サルでもわかる魔法の基礎」という馬鹿にしたものから、それこそあの赤い本並に分厚くて重い文字がぎっちり詰まってる嫌がらせだろうという本まで多種多様。

直接の手解きはないものの、送られてくる本にはリングが書いただろう解説が書かれたメモが付いておりとても親切仕様。

「……………多分。」

そう、多分。

呟いてしまうのにはちゃんと理由がある。

美穂奈はもう一度本に視線を落とし、すぐに顔を上げた。

「……………見たことない文字なんだけど。」



言葉が通じること、美穂奈は油断していた。

だがしかし、よくよく考えれば異世界で日本語が使われている方が

変なのだ。

言葉が通じる方が異常なのだ。

その為、今まで特に何も意識していなかったのだが、どうやらここ
にきて壁にぶち当たってしまった。

文字。

この世界での目に見える言葉は、日本語とは似ても似つかないもの
だった。

英語でもなければ、フランス語でもない。

そう、あえて言うならアラビア文字。

そして、美穂奈はこの文字を知っている。

「あの赤い本に浮かび上がった文字：よね、多分。」

そう、また多分。

なんせ似たような形なだけであり、同じかどうかの判別は付かない
から。

「サルでもわかる魔法の基礎」らしき本も、ラズが言い訳の様に、
「これはね、とてもわかりやすく簡潔にまとめられた素晴らしい教
本であって、決してミホナを馬鹿にしてる訳じゃないんだよ、本当
だよ！」

と言わなければ、気付かないままだっただろう。

何せ、文字が読めないのだから。

ラズに文字を教えて欲しいと言おうとしたが、この間のリングぶん
投げ事件のせいか、ラズは美穂奈を恐がり、こちらが何か言うより
も早く帰ってしまう。

リングはリングで、美穂奈の顔を見たくないのか、ラズを介してば
かりで会いに来ないので言う機会すらない。

ソフィアに頼むという選択肢は、さすがに世間知らずというだけで
文字まで読めないとかないだろうという結論に至り、言うわけには
いかなかった。

なので、仕方がなく本を眺めていたりしたのだが、残念な事に美穂
奈が知っているどの文字にも似ておらず、しかも内容は魔法とこれ

また未知のもの。

書いてある内容の予想もつかず、独学で覚えようにもちよつと無理がある。

「誤算よね……」

魔法を覚えるのに時間はかかるし、苦労するかもしれないだろうという覚悟はしていたが、まさか魔法を覚えるとかそれ以前の問題だったとは。

食堂のある一階におり、美穂奈は適当に辺りを見渡す。

「なんかないかな……」

呟いて、雑誌の入ったラックに手を伸ばす。

パラパラと中を見てみるが、やはり何が書かれているのかわからない。

とりあえず、リングがくれる難しい魔法関係の本ではなく娯楽用だろうが、読めなければただの難しい本という一緒のカテゴリである。雑誌を開いたまま、はあと溜息を吐いた美穂奈はすぐ後ろにある気配に気付かなかった。

「……ミホナちゃん？何読んでるの？」

ビクッと体が大きく跳ね、美穂奈は慌てて振り返った。

そこには、同じく驚いたような顔のソフィアが立っていた。

「ご、ごめんなさい。驚かせちゃったかしら？」

「い、いいえ！こっちこそ、ごめんなさい。」

別にやましい事をしていた訳ではないが、挙動不審になってしまう。文字が読めないのがばれたらどうしようと、無意識に思っているからかもしれない。

「あ！ミホナちゃん、それに興味あるの？」

そんな美穂奈の胸中を知らず、ソフィアは美穂奈の手の中にある本をさし、嬉しそうにそう言った。

（興味があるない以前に、読めないんだけど……）

心の中で呟きつつ、けれど今下手を言っではいけないと美穂奈はソフィアの話に乗ることにした。

「そ、そうなんですよ。面白いですよ、こういうの。」

するといつも落ち着いた雰囲気のスフィアが興奮した様に体を乗り出した。

「そうよね！根拠がないという人もいるけど、私は結構当たってると思うし、好きなのよ。」

何の話だろうと思いつながら、美穂奈はニコッとスフィアに笑いかける。

とりあえず、喋らず笑顔で乗り切ろう。

「ミホナちゃんは何タイプかしら……。意外と攻撃系とか？」
(攻撃?!何、その物騒なあれは!!)

話に付いていけず、曖昧な笑顔のまま固まっている美穂奈にスフィアは食堂の椅子をすすめてきた。

本格的に腰を据えて話す気の様だ。

「性格別魔法系統占いも良いけど、性格別色分析せいにかくべつカラーぶんせきも面白いわよね！」

「性格別魔法……えっと。」

スフィアが何を言っているのか、美穂奈にはサッパリわからなかった。

サッパリわからなかったが……

「私、興味はあるけどそこまで詳しく知らないですよ。だから、スフィアさん色々教えて下さい。」

そう、興味はある。

良くはわからないが、魔法と色カラーに関する事ならば興味はある。

だから美穂奈はなるべく怪しまれずに情報を聞き出そうとそう言った。

「そうなの？じゃあ、私が知ってる事、色々教えてあげるわね。」
そして、効果観面だった。

それからしばらくの間、美穂奈はスフィアから性格別魔法系統占いせいにかくべつカラーぶんせきと、性格別色分析せいにかくべつカラーぶんせきというものの説明を数時間にわたり聞かされるのだった。



ソフィアの長い長い話を聞き終え、自室に戻ってきた美穂奈はボンとベツトに倒れ込んだ。

ソフィアの話は面白かった、面白かったがとにかくしつこかった。おっとりした性格に見えて、好きな物には熱くなるタイプの様だ。

美穂奈は先程まで説明してもらっていた内容を思い出す。

せいにかくべつまほうけいとつうらな
性格別魔法系統占い。

俗に言う、血液型性格分類の様なものだ。

A型は几帳面だとか、O型はおおらかであるとかそういう感じ。

統計の結果が出ているという人もいれば、何の根拠もない学会では認められていないと言う人もいる。

そんな感じで、せいにかくべつまほうけいとつうらな性格別魔法系統占いも賛否両論わかれるらしい。

ゲームでお馴染みの、火属性・水属性・地属性・風属性・光属性・闇属性という系統は、この世界でも存在はするが、あまり重要視されるものではない。

ゲームや本で良く、得意系統は火属性とか、苦手属性は地属性とか聞くが、この世界の人達は皆、全ての系統の魔法を使えるらしい。

得意属性や苦手属性がないのだ。

そのかわり、属性でなく、得意不得意系統の魔法を持っている。

攻撃系・防御系・補助系・治癒系・移動系・呪術系。

攻撃魔法を得意とする者は血の気の多い者が多く、防御系魔法を得意とする者は自分より他者を思いやる系統の者が多い。

そういう系統にあるというのが、せいにかくべつまほうけいとつうらな性格別魔法系統占い。

そして、せいにかくべつからふんせき性格別色分析は、名前の通り色によって性格を判断する。

青系統は冷静な理知的タイプが多く、白系統は純真無垢な者が多い。

色は遺伝的なものなので、性格に影響されてもおかしくはないが、それだと一族中が同じ性格の人間になってしまう。

それはいくらなんでもないだろうと美穂奈は思う。

ソフィアの話は面白く、興味深いものだったが、全部が全部真実で信じようという内容ではなかった。

けれど、ひとつの目安の様なものにはなるかもしれない。

その程度の知識としてとどめておく。

占いに盲目的になる気はない。

でも…。

「緑系統で防御魔法が得意なラズは、優しくおおらかで他者を思いやる系統にあり、黄色系統で攻撃魔法が得意なリングは、明瞭活発で血の気の多い傾向にある、か。」

なかなかの的を得ていると思う。

占いも馬鹿に出来ないなと思いながら、美穂奈は眠りについた。

茶の青年と黒の青年

キョロキョロと辺りを見渡しながら、美穂奈は歩く。

何処という明確な目的地はないが、とりあえず、人の流れに沿って歩く。

宿に泊まり始めて2週間、美穂奈は外へ出てみる事にした。

部屋に閉じこもっていても魔法の勉強は進まないし（文字が読めないから）、ソフィアの手伝いも日に日に数が少なくなっていく（やり尽くしたから）、ラズが美穂奈に顔を見せる時間はどんどん減っていく（多分、恐怖から）。

そんな訳で、午前中にラズから本を受け取り、ソフィアの仕事をちよっと手伝え、午後が丸々空いてしまうのだ。

なんとなく今まで未開の地という感じで外出し辛かったのだが、ラズもリングも外出に対して何も言っていなかったし（単に忘れていただけかもしれないが）、新しい事にチャレンジしなければ道は開けないだろうと、美穂奈は1人で街へと出てみた。

そして、現在。

とりあえず歩いている。

ここがゲームの様な世界なら、片っ端から町の人に話しかけて情報収集でもするのだが、生憎と大通りを歩いている人は皆生きた人間で、美穂奈がアホな事を言えば即座に不審者扱いである。

ゲームの様に同じ事を何度も何度も繰り返してくれる親切仕様のプログラムではない。

となると、下手に話しかける事も出来ず、やはり歩くしかない。

後得られる情報としては、視覚からのものだが、それは初めてこの街を見たときのものとは変わらない。

中世ヨーロッパを思わせる町並みに、服装。

時々、出店の様なテントで食材などを売ってるところからして、スーパーやコンビニの様な物はなく、市場での買い物が普通なのだろう。

でも、だからと言ってこの街は時代遅れという訳ではない。

明かりは電気でなく炎系の魔法から生み出せるし、水道はないが、水系の魔法で何もないところから湧き上がってくる。

科学の代わりに、魔法があるのだ。

魔法が使えない美穂奈にとっては不便な世界だが、魔法が使える人からすれば、地球よりも便利なものかもしれない。

何せ、無^むから何かを生み出すのだから。

「やっぱり、魔法よね。魔法覚えなきゃ何も始まらない…ん？」

ふと、美穂奈はある出店の前で足を止めた。

見たこともない珍しいものがそこに売っていたから…ではない。逆だ。

見たことのある物が売っているから、足を止めた。

正確に言えば、実際に見たことはないが、知っているもの。

…拳銃に似た形の物が売っていたからだ。

店の人はどこかに行っているのか、留守だ。

不用心だと思いつながら、美穂奈はその拳銃を手にとってみる。

ズシリと重い、鉄の塊。

使った事は勿論ないので、これが本物かどうかはわからないが、こんな風に堂々と出店に並んでいるのだ。

この世界での拳銃は、一般市民が気軽に購入出来るものなのかもしれない。

「…でも、拳銃って魔法ってより、科学って感じがするんだけどな。」

「お！お客さん、それ気に入った？」

「え？」

急にかけられた声に、美穂奈は驚いて顔を上げる。

そこには、茶の髪に茶の瞳をした平凡な若い青年が立っていた。

「でも、ごめんね。それ、まだ完成してないんだ。」

そう言って、青年は美穂奈の手から拳銃を取り上げる。

どうやら、この店の主人の様だ。

主人というには若過ぎる印象のあるその青年は、美穂奈から取り上げた拳銃をクルクルと手の中で回す。

その様子に、美穂奈はハラハラした。

いくら安全装置がついてるからといって、あんな雑な扱いをして万が一にも暴発とかしたらどうする気なんだろうか。

「…どうしたの、お客さん？」

ビクビクと怯えている美穂奈に青年は不思議そうに首を傾げた。

「え、だ・だって、それ、暴発とかしないの？」

そつと拳銃を指差せば、青年は手の中の拳銃を見下ろす。

「それって、コレ？…大丈夫だよ、まだ完成してないし、玉入れてないし。」

「え、あ、そうなの。」

ほう、と溜息を吐いて、美穂奈は安心したと破顔した。

弾が入っていないのなら、暴発のしようがない。

「それ、まだ未完成なのね。完成品で言われても頷けるぐらい良く出来ているわ。」

本物を見たことはないけども、オモチャではないとわかる作り。

デザイン性はないけども、シンプルで細部もとても綺麗に作り込まれているその拳銃に賛辞を送れば、青年は少し驚いたように美穂奈を見た。

そして、急に店を片付け始めた。

「……………ねえ、お客さん。今からちょっと時間ある？」

「え？ええ、時間はあるけど…。」

突然の店じまいに、何か不快にさせる様な事を言ってしまっただろうかと思いながら頷けば、青年はニツコリと笑った。

「じゃあさ、今からオレとデートしない？」

「…え？」

何でそんな事になったんだ？と思う間もなく、青年は美穂奈の手を取り、走り出す。

「ええ？！ちょ、ちょっと！！」

美穂奈の抗議の声なんか聞こえないとばかりに、青年はそのまま美穂奈を引っ張り走る。

「あ、そうだお客さん、名前は？オレはアンバーⅡブラニカ。」

「み、美穂奈よ！それより、ブラニカさん？」

「アンバーで良いよ。ミホナ可愛いし、呼び捨てで良いよ。」

「じゃあ、アンバー！ちよつとどこ行くの？！」

今日街に出たばかりなので、元々地理には詳しくないが、アンバーが走り出した方向は宿と逆方向だった。

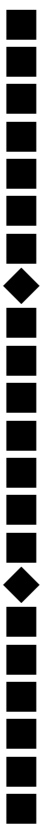
あんまり遠くなると迷子になってしまう。

走りながら問えば、アンバーはニツと笑った。

「オレの家。ミホナに見て欲しいものがあるんだ。」

「へっ？は、ええーっ！！」

どうしていきなり家にお呼ばれされる事態になっているのかわからず叫ぶ美穂奈を、アンバーは気にした風もなく引っ張り連れて行くのだった。



「足元、危ないから気を付けて。」

そう言って差し出される手を、美穂奈は素直に受け取った。

アンバーは美穂奈の抗議の声を無視し、どんどん町外れの方へ引っ張り連れてきた。

何度も同じ様なレンガ造りの家の角を曲がり、何度も同じ様な壁に沿い、走る。

そうなればもう美穂奈はおとなしくなるしかない。

何故なら、今ココで放り出されたら、迷子確定である。

アンバーの言う通り従い、もう一度あの大通りへ連れて行ってもらうしかないのだ。

地下へ続く階段を、アンバーの手を支えにおりていく。

「…ここがアンバーの家？」

先程、家に連れて行くと言われたのを思い出しながらそう言えば、アンバーはニコツと笑った。

「んー、さっきは家つつたけど、正確には家じゃなくて…、作業場なんだ。」

「作業？」

「そう。これとか、そこで作ってるんだよ。さっきミホナには、これはオレが作ったって言ったけど、正確に言うとかレを設計したのはオレだけど、実際に作ってるのは別の奴なんだ。だからさ、折角だからそいつにも会ってやってよ。で、さっき見たいに褒めてやってくれないかな。きつとあいつも喜ぶよ。」

そう言ってアンバーが取り出したのは先程の拳銃。

それを見て、美穂奈は急に心配になってきた。

物騒な物を作るのにピッタリの地下へと続く薄暗い階段。

こんなところにノコノコついて来てしまっただけ良かったのだろうか？

相手は未完成で危険性がないとは言っても拳銃保持者だ。

人懐っこそうな笑顔に、平凡な外見で全く持って危険性等を考えなかったが、危ない人かもしれない。

しかも、仲間のいる場所に案内されるとか、絶対変である。

何故なら、美穂奈は先程偶然アンバーの店に立ち寄り、拳銃の出来を褒めただけで、特に親しい間柄だとかそういったものがない。

なのに、作業場に案内とか普通じゃない。

チラリと辺りを見渡す。

（とりあえず、いつでも逃げられるように退路だけ確認しておこう。

）

そういえば、元いた世界ではこんな怪しい人間は常に疑っていたなと美穂奈はアンバーを見て思う。

否、怪しくなくても疑っていた。

けれど、ここは異世界で、大財閥の1人娘でなくただの美穂奈でしかない自分がまさか誘拐などないだろうと、ちよつと油断し過ぎたかもしれない。

異世界だからこそ、何があってもおかしくないのに。

暗い地下通路を少し進んだところにある扉の前で、アンバーは足を止めた。

アンバーは美穂奈を振り返り、ニコツと笑うと、大仰にお辞儀をした。

「ようこそミホナ！オレ達の樂園へ！！」

芝居がかった台詞付きで開けられた扉の向こうには、普通の家の居間をそのまま切り取った様な生活空間が広がっていた。

そして、そのソファアに座ってこちらをポカンと見ている漆黒の髪と瞳の青年と目が合った。

「…………えっと、こんにちは？」

とりあえず挨拶してみると、漆黒の髪の青年はビックリと肩を震わせた。

そして、美穂奈の後に立つアンバーの方をキッと睨んだ。

少し長めの前髪から覗く眼光が鋭く光る。

けれどアンバーはそんなの気にしないとばかりに、部屋の中に入ってきて、空気も読まず自己紹介を始めた。

「ただいま、ジェット。ミホナ、紹介するよ。これがオレの相棒、ジェットⅡスコール。頭は壊滅的に悪いけど、手先は天才的に器用なんだよ。後、ちよい人見知り。」

そう言って紹介されたジェットという青年は、美穂奈から隠れる様にソファアの影に移動した。

「ジェット、大丈夫だって！良く見ろよ、可愛い女の子だって。名前はミホナって言うんだぜ。お前が作ったコレ、褒めてくれたんだよ。」

そのアンバーの声にジェットはピクリと反応し、そっとソファアの

背もたれから顔を覗かせた。

その様子に、アンバーは美穂奈に笑いかける。

「な、そうだよなミホナ。」

「え、ええ。飾り気はないけども、細部まで良く作りこまれてて凄いなって…。」

思っただけで何故かこんなところまで連れてこられてしまったのだけれど。

美穂奈のその言葉に、ジェットはようやくソファアの影から出てきてくれた。

「あ、ありがとう。そういう風に褒めてくれたの、アンバーで2人目。」

そう言って笑うジェットは、どう見ても美穂奈より年上なのに美穂奈より幼く感じた。

そのままニコニコとジェットと微笑みあう事数十秒、美穂奈はゆっくりとアンバーを振り返った。

「……で、アンバー？私は本当にコレだけの為に連れて来られたのかしら？」

「うん？もちろん！いや、ジェットの奴にちよつとは自信を持ってもらいたくてさ。ありがとうミホナ、うまくいった！！」

そう言って屈託なく笑うアンバーに、美穂奈は脱力する。

なんだか途中変に気張ったりしたけども、やはり全て考え過ぎだった様だ。

「まあ、良いけどね。暇だったし…。でも、これだけの腕なら、何も私じゃなくても誰かしら褒めてくれたりしないの？」

素朴な疑問だった。

ジェットの作った拳銃は、素人目から見てもとても綺麗に作られている。

もし何かしら問題があるなら構造だろう。

それならば、責めるべきは設計担当のアンバーだろう。

何故そんなにも自信がないのかと聞けば、ジェットは急にシユンと

落ち込んでしまった。

「あゝ。ミホナ、ミホナ。」

ちよいちよいとアンバーに手招きされ、何かまずい事を言ってしまったかと美穂奈は慌てて口に手を添え、アンバーの近くへと体を寄せた。

アンバーと美穂奈は2人部屋の隅で体を丸め、ヒソヒソと声を潜め話す。

「んとさ。ジェットは、見たら分かると思うけど、黒の色持ち^{カラー}なんだよ。もちろん、ジェットの親、親戚一同そりゃあもうジェットに期待しまくった。んだけどな…、さっきも言ったがジェットは手先は神がかつてるぐらい器用だけど、頭の方が壊滅的でさ…。そのせいでもう親からも親戚からも毎日毎日ボロクソ言われてさ…、自信なんて風化しちまったんだよ…。」

可哀想だろ？と同意を求められる。

たしかに、親や親戚一同から毎日ボロクソ言われるのは可哀想だと思う。

思うけど…。

「えっと…、イマイチ良くわからないんだけど？」

そう、思うけどもアンバーの説明には色々不明な事が多過ぎる。

黒の色持ち^{カラー}だと何故将来を期待されるのか。

原色持ちならともかく、黒ってそんな貴重なものだっただろうか。そして、もう一つ。

「えっとね、黒が先天的に魔力の多い人間だったなら、それで良いんじゃないの？どうしてそこに頭の良し悪しがかかわってくるの？たしかに、馬鹿より頭良い方が良いに決まっているけど、魔力が元々多いなら、何も考えずにとりあえず魔法使えばそれなりの級^{ランク}になるんじゃない？」

そう疑問を口に出せば、アンバーはしばし美穂奈を呆然と見ながら呟いた。

「…ミホナって、もしかしてジェット以上に頭悪い？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5970y/>

colors

2012年1月10日13時49分発行